

平家物語、鍋島本と平戸本

高橋 貞一

はしがき

平家物語百二十句本の成立、百二十句本と屋代本との關係などに就いて考究を續けてゐる筆者に、最も注目すべき傳本の調査を得たので此處に詳説することとする。この鍋島本は、かつて島津忠夫氏が「小城鍋島文庫本平家物語をめぐつて」(佐賀大學文學編集4)に論ぜられ、山下宏明氏が「平家物語百二十句本考」(國語と國文學、三十八年十一月號)や、「平家物語百二十句本再考」(古典文庫、平家物語解説、四十三年十月)にも觸れられた本であるが、昨年來、山下氏藏の寫眞を拜借することを得て細部にわたつて調査考察することを得たので、筆者の見解が、前述の諸論文と異なるものがあり、敢へて發表する所以である。本研究のなるは、島津氏及び山下氏の御好意によるものである。深甚の謝意を表したい。

さて山下氏が小城本と名づけてゐるが、傳來の上からも、鍋島本と呼ぶことにする。

鍋島本について

平家物語、鍋島本と平戸本

本書は、佐賀大學現藏。現存十一冊。卷十一欠。片假名交り九行書。各卷末に、「十二卷之内、鍋島加賀守直茂」とある。鍋島加賀守直茂は、秀吉に仕へ、元和四年六月三日歿、八十一歳と傳へるに依り、慶長頃の寫と島津氏は云ふが、更に古い書寫と認めて差支ないであらう。卷三のアソビの裏に、「直茂公御寫本」とあるが、自筆本でないといふ。卷頭に目錄があり、章段を設けてゐる。卷一の目錄を示せば、

平家卷第一

- 一 忠盛昇殿叟
- 一 平家一門繁昌叟
- 一 清盛出家叟
- 一 白拍子義王仏叟
- 一 二代后 近衛院 后立叟
- 一 皇太后大宮御出家叟
- 一 興福寺延曆寺額打論叟
- 一 清水寺炎上叟

一 後白川院御法体^一夏

一 資盛朝臣殿^{下松殿乗合}夏

一 主上高倉御元服^一夏

一 左衛門入道西光近習^一夏

一 加賀守師高賀州國務并舍弟目代師經宇河寺狼藉^一夏

一 白山神興入洛^一夏付賴政振舞^一夏

一 後二條關白薨御^一夏

一 平大納言時忠山門勅使^一夏

一 新大納言成親^{以下謀叛}夏

一 内裏焼亡^一夏

とあるが、本文中の題目は、卷頭に祇園精舎^一夏とあり、二代后立^一夏の次は、皇太后宮大宮御出家^一夏でなくして、二條院崩御^一夏とあり、後二條關白薨御^一夏、新大納言成親^{以下謀叛}夏もなく若干目錄と異なる所がある。

卷二の目錄は、

平家卷第二

一 天台座主明雲僧正被沒收所職被召還御本尊^一夏

一 覺快法親王天台座主御補任^一夏

一 先座主明雲罪科儀定^一夏

同配流^一夏

同山門大衆先座主取留^一之夏

付一行阿闍梨火羅國被流^一夏

一 成親卿以下謀叛多田藏人行綱忠言^一夏

一 成親卿父子被召誠^一夏

一 西光父子被誅^一夏

一 重盛公父禪門諷諫^一夏

一 成親卿備前兒嶋遷流^一夏

一 成經朝臣備中妖尾流罪^一夏

一 法勝寺執行俊寛 平判官康賴

并妖尾遠流^一之夏

一 丹波少將成經薩州鬼海嶋遠流^一夏

一 康賴入道鬼海嶋祝文^一夏 同二首歌札

一 成親卿出家^一夏

付源左衛門尉信俊有木別所參^一夏

一 彗星^一夏

とある。然し本文中の題目は、卷頭は天台座主之^一夏とあり、重盛公父禪門諷諫^一夏は相國禪門諷諫^一之夏とあり、丹波少將成經薩州鬼海嶋遠流^一夏はなく、鬼海嶋祝文同二首歌^一夏とあり、最後は、成親禪門逝去^一夏と彗星^一夏となつてゐる。卷三の目錄は、

一行綱回忠之^一夏

一 御産之^一夏

一 大塔建立之^一夏

一 賴豪死去之^一夏

一 少將都入之^一夏

一 有王鬼海嶋渡^一夏

一 小松殿熊野參詣^一夏 付夢想^一夏
金渡之^一夏

一 燈籠付大地震
 一 法印問答之夏
 一 大臣被流夏
 一 中山行高出仕之夏
 一 城南離宮夏
 とある。本文中の題目は卷頭に、行綱回忠事とありて、有王鬼海嶋渡夏は有王夏とあり、法印問答之夏はない。卷四の目録は、

平家卷第四

- 一 高倉院嚴嶋御幸夏
- 一 先帝御即位夏
- 一 高倉宮謀叛夏
- 一 源氏汰之夏
- 一 那智軍之夏
- 一 鳥羽殿鼠沙汰夏
- 一 長兵衛合戦之夏
- 一 木下鹿毛之夏
- 一 瀧口競夏
- 一 自三井寺到山門牒狀并南都返牒夏
- 一 大衆汰付矢切之但馬夏
- 一 淨妙房夏
- 一 足利付宇治川先陣夏
- 一 賴政最後之夏
- 一 宮之被御討之夏

平家物語、鍋島本と平戸本

一 通乘沙汰之夏
 一 賴政昇殿并三位射鸛夏
 一 三井寺炎上
 本文中の題目は、卷頭には題目なく、先帝御即位夏より始まり、淨妙房夏はなく、橋合戦之夏とあり、以下は若宮之沙汰夏、賴政昇殿并三位射鸛夏、三井寺炎上之夏とある。

卷五の目録は、

- 一 都遷之夏
- 一 月見之夏
- 一 福原物怪之夏
- 一 青侍夢之夏
- 一 大庭早馬之夏
- 一 朝敵汰付延喜帝驚夏
- 一 咸陽宮之夏
- 一 文學荒行之夏
- 一 同勸進帳之夏
- 一 同流罪之夏
- 一 賴朝院宣之夏
- 一 薩摩守東國發向夏
- 一 重而高倉院嚴嶋御幸之夏
- 一 富士河之夏
- 一 五節汰沙之夏
- 一 南都炎上之夏

とある。本文中の題目は、巻頭にはなく、月見之夏より始まり、文覺
荒行并勸進帳之夏とあつて、又勸進帳之夏、文學流之夏とある。以上
卷三、卷四、卷五の三冊の目録については、島津氏が、一方流本、特
に梵舜本に近似する由を述べて居られる。が本文とは關係がない。

卷六の目録は、

一 花林院僧正榮圓逝去夏

一 上皇高倉院崩御夏

一 此君御在位間夏付葵女御并小督局夏

一 入道安藝巖嶋内侍腹姫君法皇被進夏

一 木曾冠者義仲於北國謀叛夏

一 入道相國病患夏

一 清盛爲白川院御子夏

一 慈心坊尊惠炎魔廳屈請夏

一 流砂葱嶺夏

一 五條大納言邦綱逝去夏

一 東大寺造始夏

一 須俣川合戦夏

一 越後國住人城太郎助長頓死夏

一 諸方平家祈禱不成就夏

一 中宮號建禮門院夏

一 權少僧都顯眞於日吉社一万部法華經讀誦夏

一 城四郎助持与木曾義仲於信濃國横田川合戦夏

とある。上皇高倉院崩御夏は、上皇崩御夏とあり、次は、付葵之女

御夏、小督之局之夏と續き、木曾於北國謀叛夏とあり、最後の方は、
中宮院號建禮門院夏、太白犯昴星夏、顯眞於日吉社万部法華經讀誦夏、
城四郎與木曾信濃國横田川合戦夏とある。

卷七の目録は、

一 朝覲行幸夏

一 木曾義仲与兵衛佐頼朝不快夏

一 木曾子息清水冠者義基遣兵衛佐夏

一 小松三位中將維盛已下人々北國討手發向之夏

一 皇后宮亮經正竹生嶋參詣夏

一 越前國火打城合戦夏

一 木曾願書夏於埴生宮

一 砥波山黑坂志保篠原等合戦夏

一 齊藤別當眞盛錦直垂着夏

一 伊勢大神宮可有御參詣由御立願夏

一 奈良御門御時天平十五年大宰少貳

廣繼謀叛夏

一 木曾義仲山門牒狀夏

一 平家一門人々山門願書夏

一 法皇鞍馬寺忍御幸夏

一 平家一門落都趣西國夏

とある。本文中の題目には、本曾願書夏を脱する。卷八の目録は、

一 法皇自比叡山還御夏

一 新帝御即位夏

一 平家太宰府下着支

一 惟尊惟仁親王位靜支

一 主上宇佐社行幸支

一 緒方三郎惟榮支

一 平家太宰府落支

一 院御使康貞鎌倉下着支

一 木曾左馬頭猫間中納言對面支

一 水嶋合戰支

一 室山合戰支

一 法住寺殿木曾義仲奉寄支

一 賴朝爲代官義經尾張國着支

一 義仲与平家内通支

とある。この卷は本文中の題目と一致する。

卷九の目錄は、

一 平家讃岐國屋嶋住居支

一 木曾義仲平家追討支雖被仰下

一 自東國討手上洛之由聞之留支

一 自東國蒲冠者範賴九郎義經爲木曾討手上洛支

一 摺墨活食支

一 宇治川合戰支

一 義經院御所六條殿馳參支

一 義仲討死支

一 同頸被渡支

一 一谷合戰支

とある。本文中の題目には、自東國範賴義經木曾討手上支とある。

卷十の目錄には、

一 一谷被討平家頸被渡大路支

一 惟盛故鄉音信支

一 重衡六條東被渡支

一 内侍所可返入都之由屋嶋被下御使支

一 重衡關東下向支

一 同重衡賴朝對面支

一 千手前支

一 惟盛高野山并熊野參詣同入水支

一 池大納言賴盛關東下向賴朝對面支

一 新帝御卽位支

一 蒲冠者範賴任三河守九郎義經蒙院宣支

一 元曆改元支

一 備前兒嶋藤津合戰支

一 御禊大嘗會被行支

とある。この卷は本文中の題目と一致する。

この目錄が鎌倉本と殆ど同一であると島津氏はいふ。

卷十二の目錄は、

一 宗盛清宗父子關東下向支

一 同父子被誅渡首支

一 重衡被渡南都被誅支

- 一 七月九日大地震
- 一 義經任伊豫守義顯改名
- 一 源氏數輩受領
- 一 平家生虜國と遠流
- 一 時忠能登國配流
- 一 建禮門院大原寂光院御隱居
- 一 爲義顯討手土佐房昌俊上洛
- 一 同合戰昌俊誅伐
- 一 義顯都沒落之
- 一 北條四郎時將上洛
- 一 源二位頼朝日本惣大將惣地頭
- 一 三郎先生 十郎藏人被誅
- 一 六代御前
- 一 法皇大原御幸
- 一 伊賀大夫大路合戰
- 一 越中次郎兵衛盛次
- 一 惡七兵衛景清
- 一 丹後侍從忠房被助湯淺
- 一 土佐守宗眞關東被下
- 一 文學隱岐國流罪之
- 一 六代殿被誅平家一門之迹終

とある。本文中の題目には、小原御幸とあり、惡七兵衛景清はない。以上の目録は屋代本の目録と極めて近い。何れが前出かは明らかに

し難いが、本書の本文と目録とは本來密接な關係があるかどうかは疑はしいものがある。恐らく後述の如く、混合本文であり、本文中の題目と異なる以上、目録は後より添加したものと認むべきであらう。

二

次に本文に就いて見るに、その大略を云へば、卷一、卷二は屋代本と同類、卷三と卷四は一部に覺一本の本文を持つ混合本であり、卷五以下は百二十句本と同類である。従つて、本書の成立は、屋代本、覺一本、百二十句本の同時存在を認めない限り説明がつかない。と同時に、覺一本、屋代本、百二十句本の成立關係を示す根據も持つが如くである。各卷に就いて詳細に見て行かうと思ふ。

卷一に就いて見るに、前述の如く、全般的には屋代本と同一である。祇園精舎に、

高望王時寛仁二年五月二日始平姓ヲ給テ

とあるが、他本にはない語である。本書の増補である。寛仁は後一條天皇の年號で誤。高棟王に平を賜つたのは天長二年閏七月である。忠盛昇殿に、

忠盛力郎從元ハ爲一門ケルガ、木工助平貞光ガ孫、左兵衛家貞ト云者アリ

屋代本には、

又、忠盛が郎等元ハ一門タリケル進ハ、三郎大夫季房か子ニ左兵衛尉家貞ト云者アリ

とあり、共に覺一本に比し誤脱がある。覺一本には、

忠盛が郎等、もとは一門たりし木工助平貞光が孫、しんの三郎大夫季房が子、左兵衛尉家貞といふ者あり(八五五)とある。本書に、

刀ヲ帶スル用意ノ程コソ神妙ナレ

とある所は、屋代本に、

帶刀之由露スト云ヘトモ、後日之訴訟ヲ存知シテ帶シ木刀ヲケル用意ノ程コソ神妙ナレ

とある語が脱したと認められる。平家一門繁昌爰には屋代本と同じく熊野御利生の事がない。清盛出家爰には、

次男宗盛中納言、右大將、惟盛

とあつて、「右大將、三男知盛三位中將、四男重衡藏人頭、嫡孫」の語を脱する。又近衛中衛に關する事も屋代本と同じく存する。次に白拍子義王仏等爰は、屋代本拔書のものに比するとかなりの相違がある。そして全般的には百二十句本と相似する所が多い。例へば、

入道相國舞ニ目出テ仏ニ心ヲ移サレケリ、佛御前申ケルハ、此ハ左有ハ何夏ニ候ゾヤ、素ヨリ童ハ、推參ノ者ニテ出シ進セ候ヒツルヲ、義王御前ノ申狀ニテ社召返しマイラセテ候フナルニ、加様ニ召置レ候ハ、義王御前ノ思ワン心ノ中コソ耻フ候へ。

とある様に、傍線を付した所は百二十句本に類する所である。

義王ウシト思シ道ナレド、親ノ命ヲ背カジト泣々又出立ケル心ノ中コソ無慙ナレ、泪ノ間ヨリ、

露ノミノ別シ秋ニ消ハテデ又言ノ業ニ懸ルツラサヨ

とある所も又百二十句本に一致し、屋代本には、「泪ノ間ヨリ」以下

はなく、

月モ傾キ夜モ深テ心ノ奥ヲ尋ヌルニ仏モ昔ハ凡夫也、我等モツイニハ仏也、仏性具セル身ヲ隔ルノミコソカナシケレ

も、傍線を付した所は百二十句本に近く、本書は、仏性の上に、「イツレモ」を脱し、屋代本には、「月モ傾キ夜モ深テ心ノ奥ヲ尋ヌルニ」はなく、「カナシケレ」が「ヲロカナシ」となつてゐる。覺一本は、「かなしけれ」である。この語の流動に就いても考ふべき所が多い。

書置給シ筆ノ迹現ニモト思ヒ知ラレテ候ゾヤ、イツゾヤ又被召進セテ今様謠ヒ給ヒシニモ思知レテ社候シカ、其後行末ヲ焉ニ共知ラザリシニ加様ニ様ヲ替テ一所ニト承リテ后ハ、餘ニ羨山敷テ常ニ暇ヲ申セシカドモ、入道殿更ニ御用在サズノ、ツクヅク物ヲ案ズルニ娑婆ノ榮花ハ夢ノ中ノ夢、樂榮テ何カセン、人身ハ難受、佛教ニハ難逢、年ノ若キヲ憑ベキニ非ズ。

とある所も、又百二十句本に近似し、屋代本には、

書置給シ筆ノ跡モケニモトコソ覺シカ、何ソ哉被召テ今様歌ヒ給シモ被知思テ有シソ、其後故ナウ承之間餘ニ御行末ノ承度テ尋聞程ニ様ヲ替テ皆一所ニト聞ヘシ程ニ餘ニ床敷覺テ常ハ暇ヲ申シカトモ更ニ御用ヒモ坐々サス、傳物ヲ案スルニ、我イツマテ生死ノ木綱ニ被繫テ角浮世ニハ可廻、娑婆ノ榮花ハ夢ノ中夢、樂昌ハテモ何カハセン、人身ハ難受、佛教ニハ難會、此度ナイリニ沈ミナハ多生廣劫隔ツトモ浮ヒ上ラン事難シ、年ノ若キヲ憑ヘキニ非ス。

とある。これを覺一本に見るに、

書置給ひし筆の跡、げにもとおもひさぶらひしぞや。其後はざいし

よを焉どもしりまいらせざりつるに、かやうにさまをかへて、ひと所にとうけ給はつてのちは、あまりに浦山しくて、つねは暇を申しかども、入道さらに御もちいましませず、つくぐ物を案ずるに、娑婆の榮花は夢のゆめ、樂しみさかへて何かせむ。人身は請がたく、仏教にはあひがたし。此度ないりにしづみなば、たしやうくはうごうをばへだつとも、うかびあがらん事かたし。年のわかきをたのむべきにあらず。

百二十句本には、

かきをき給ひしふでのあと、げにもおもひしられてさぶらふぞや、いつぞや又めされまいらせて、いまやうたひ給ひしにも、おもひしられてこそさぶらひしか、このほど御ゆくゑをいづくともしらざりつるに、かやうにさまをかえて、一とこころにとうけ給りてのちは、あまりにうらやましくて、つねはいとまを申せしかども、にう道殿、さらに御もちいましませず、つくぐものをあんずるに、しやばのゑいぐははゆめのうちのゆめ、たのしみさかへてもなにかはせん、にんじんはうけがたく、ぶつけうにはあひがたし。此たびないりにしづみなば、たしやうくはうごうをふるともうかびがたし、としのわかきをたのむべきにもあらず。

とある。此等の各本の性格を熟慮するに、百二十句本と屋代本とを比べると、傍線を付した如く、屋代本の「我イツマテカ生死ノ木綱ニ被繫テ角浮世ニハ可廻」は百二十句本にはなく、覺一本にもなく、屋代本の増補とも認むべきものであらう。覺一本は百二十句本や屋代本にある、「いつぞや又めされて……」の語がなく、百二十句本、屋代本

の増補といふべく、本書は屋代本よりも更に簡略化せられて、「此たびないりにしづみなば……」の語も脱せられてゐると認められよう。これによりて、覺一本より漸次増補せられ行く形態と一方では簡易省略せられて行く二つの變化が認められよう。他の多く異本研究によりてみるに、増補の場合は平曲の流傳による増補で、他の資料によるものは極めて小く、多くは口誦的自然な流動である。それにしてもこの増補と簡略化との二つの作用の存することが平家物語の詞章研究上極めて複雑な本文を成立せしめて居るのである。この場合にもし屋代本を最古として考へるならば説明がつかないであらう。

何地へモ迷ヒ行、如何ナラン薜ノ薜松カ根ニモ倒レ伏、命ノ有年限リハ念仏ノ、往生ノ素懷ヲ遂ント云テ、サメドトゾ泣居タル、義王泪ヲ押テ申ケルハ、其レ程佛御前ノ思給ヒケルトハ夢ニモ不知、素ヨリ和御前ヲ恨ムベキニ非ズ、浮世ノ中ノサガナレバ身ヲウシトコソ思フベキニ。

これも屋代本には、
何チヘモ迷行テ何カナ覽松カ根若ノ薜ニモ命ノ有ラン限りハ念佛シテ往生遂ント云ケレバ義王本ヨリ和御前ノ非恨ニ憂世ノ中ノサガナレバ身ノ程ヲコソ思ベキニ……。

とある。これも百二十句本に近く、最後に近く、

素懷ヲ遂ゲルトコソ聞ヘシ、入道相國佛ヲ失ヒ給ヒテ諸國七道ニ手ヲ分テ求メ給ヘド無カリ鼻、其後遙ニ程經テ聞出シタリケレドモ左様ニ世ヲイトイタラン者ヲバ中ニ兎角フ云ニ及ハズトテ御尋モ無リケリトゾ聞ヘシ、後白川ノ法皇ノ長講堂ノ過去帳ニモ……。

とあるが、傍線を付した所は、覺一本、百二十句本になく、屋代本、本書に存する詞章である。これは屋代本と全く一致するものではないので、屋代本による補入ではない。以上この義王の章を吟味するに、大略は百二十句本の本文でありながら、屋代本に類似する性格を持つことは、百二十句本より屋代本の成立する過程を示すものであらうか。

二代后^{近衛院}后立^{二条院}以下は、殆ど屋代本と同文であるが、屋代本と異なる所に百二十句本と一致する所があり、逆に屋代本が本書と異りて百二十句本に一致する所もある。例へば、二條院崩御変に、

同七月廿七日上皇ツイニ崩御成ヌ

は屋代本、百二十句本には、「主上既ニ」とある。

皇太后大宮御出家変に、

父ノ大臣供奉ノ上達部出車ノ儀式如意仕立進せ給ケリ

屋代本には、

供奉ノ上達部出車ノ儀式心コトニ出奉ラせ給ケリ

とある。資盛朝臣殿下松殿乗合変には、

本島切テ資盛ガ恥ヲソ、ゲトゾ宣ケル

宗徒ノ兵ニハ伊勢守景綱ヲ始トメ、六十餘人、都合其勢三百餘騎、

廿一日ニ成シカバ中御門猪熊堀川ノ邊ニ引ヘテ殿下ノ御出ヲ今ヤ今

ヤト待カケ奉ル、殿下ハ此変夢ニモ知シ食レズ。

とある。傍線を付した所は、百二十句本になく、覺一本にもなく、屋代本、本書にある所で、増補ともいふべき語であらう。主上高倉御元服変に、

朝覲ノ爲法住寺殿へ行幸成、其比妙音院太政大臣……。

平家物語、鍋島本と平戸本

とありて、覺一本に、

法皇女院待うけまいらせさせ給て、叙爵の御粧もいか斗らうたくおぼしめされけむ、入道相國の御娘、女御にまいらせ給ひけり。法皇御猶子の儀なり。

百二十句本に、

ほうわう女あんまちうけさせ給ひて、うみかうぶりの御よそをひ、いかばかりらうたくおぼしめされけん、しゅじやう御とし十三さいにうだうしやうこくの御むすめ、ねうごにまいらせ給ふ。ほうわう御ゆうしのぎなり。

とある語が屋代本、本書には存しない。又同じ章に、

火燃付、臈御寶殿ニ押懸ケレバ、宮人集テ是ヲ消シツ、神ハ不稟非禮ト申ニ……。

とあるが、屋代本にも、

火燃付テ臈テ御寶殿ニ押懸ケレバ、氏人共集テ是ヲ打消ス、神ハ非例ヲ不請ト申スニ……。

とあつて、覺一本、百二十句本にある外法の僧の事を脱する所がある。然し又百二十句本になく、覺一本にある所が屋代本、本書にある所もある。それは、百二十句本に、

平家をほろぼし、ほんまうをとげばやとの給ひけるこそおそろしけれ、平治にも……。

とあるのに對して、本書に、

滅平家本望ヲ遂バヤトコソ宣ケレ、父ノ卿モ僅ニ中納言マデコソ至ラレシカ、其末ノ子ニテ位正二位官大納言ニ至テ、大國アマタ給

テ、子息所從壽朝恩、何ノ不足ニカ、ル心付ケン、只天魔ノ所爲トゾ見ヘシ、平治ニモ……。

屋代本も殆ど同文である。同章に、百二十句本と記事の順序の異なる所が二箇所ある。それは、

俊寛モ僧ナレドモ、心武ク奢レル人ニテ、加様ノ変ニ與レケル、新大納言多田藏人ヲ呼テ御邊ヲ一方ノ大將ニ憑ナリ、シヲウセヌル物ナラバ、國ヲモ庄ヲモ所望ニ隨ベシ、先弓袋ノ料ニトテ、白布五十端ヲ送ラレケリ、上古ニハ北面ト云事ナカリキ。

とある。右の傍線を付した所は百二十句本では、俊寛の事の前に出る。覺一本、百二十句本では、

上古ニハ北面ト云事ナカリキ。

の前に妙音院太政大臣任官の事が来るが、屋代本、本書は、日吉神輿入洛の前に述べる。次に白山神輿東坂本入御変に、願立の記事のない事である。屋代本も同じ。

御母北政所ヲ是ヲ御數有テ、祈申サセ給シガ暫シ御平愈ト聞ヘサセ給シガ、遂ニ永長二年六月廿日御病重セ給テ同廿八日御年三十八ト申ニ遂に薨御成ニケリ、未四十二ダニモ満タセ給ハデ大殿ニ先立給変淺猿カリシ変ドモナリ。

とあるが、屋代本には、

御母北ノ政所是ヲ御數アテ、祈申サセ給シカバ、暫シハ御平愈ト聞ヘサセ給シガ、遂ニ永長二年六月廿六日御病重ラセ給テ、同廿八日御年三十八ト申ニ薨御成ニケリ、御心ノ猛サ未ダ理ノ効サマメヤカニユ、シキ人ニテ渡ラセ給シカドモ、事ノ急ニ成ケレバ、御命ヲ惜

マセ給シゾ糸惜キ、四十二ダニモミタセ給ハデ、大殿ニ先立進セサセ給フゾ淺猿キ。

とある。傍線を付した所は本書の脱文である。覺一本、百二十句本には略同文がある。賴政振舞変には、

弓矢ヲ取テ未其不覺ヲ不聞、剩ヘ歌道ノ達者ニテサヘアレ、ナンゾ何ゾ時ニ臨ンデ情無ク耻辱ヲ可與。

とあるが、屋代本には、二條院の時の鸚退治の事がある。これは覺一本には卷四の鸚の章に出るもので、その一部を屋代本が此處に移したと推定すべきものである。本書は賴政の歌、「深山木のその梢……」も脱して居る。以上が卷一の要所であるが、屋代本と同類といつてもそれよりは後出の性格を多く有するといふべきであらうか。

卷二は殆ど屋代本と同文といつてよい。僅かに次の數箇所には差があるのみである。西光公子被誅変に

加賀守師高尾張ノ糸田ニ流サレタリケルヲ打手ヲ遣ノ被誅、次男近藤判官師經、其弟右衛門尉師衡共ニ斬ラレニケリ。

屋代本には、

加賀守師高尾張ノイト田ニ在ケルヲ打手ヲ遣テ彼誅、弟近藤判官師經被、獄定タリ、シヲ召出サレテ首ヲ刎ラル、弟師平共に切ル、郎等三人同ク被刎首ケリ。

とある。屋代本より簡略であるのは誤脱であらう。屋代本は百二十句本に比して簡略であり、百二十句本は覺一本よりも簡である。同章の中に、

上ハ西八條ニ今朝既ニ被押籠サセ玉ヒ候、又君達モ皆被取サセ、参ヘ

シトコソ、承リ候へト申せば、少將ナド去バ其程ノ事ヲバ宰相ノ許ヨリハ今及ハ被告ザルヤラント宣モハテヌニ使アリ。

とあるが、傍點を付した所は屋代本にはなく、百二十句本と一致する所である。

成經朝臣備中妖尾流罪吏に、

我後世ヲ訪ヘト宣モ敢ズ泣玉ヘバ見ル人袖ヲ絞リケル、福原ノ使ハ攝津ノ右備門盛澄ト云者ニテゾ有ケル、今夜聽テ鳥羽マデ出サセ玉テ……。

とある。傍線を付した所は屋代本になく、覺一本は前に出す。本書は百二十句本と同一で、百二十句本による補訂であらうか。

俊寛康頼妖尾流人吏に、

一日片時モ人ノ命可有トモ見ヘザリケリ、去レドモ丹波少將シウト

平宰相ノ所領肥前國加世ノ庄ヨリ……(中略)

終ニ角背キハテケル世中ヲ疾捨去リシコトゾクヤシキ

ト書テ都ヘ上セタリケレバ留置シ妻子ドモ何斗ノコトヲカ思ケン

とある。屋代本には、

一日片時モ人ノ命ノ有ベシトモ不見ケリ、サレドモ丹波少將(中略)

ツ井ニカク背終ケル世ノ中ヲトク捨ザリシ事ゾクヤシキ

とある。百二十句本には、

一日へんじも人のいのちあるべしとも見えざりけり、いわうといふもののみちみてり、かるがゆへにいわうがしまとぞ申ける、されどもたんばのせうしやう……(中略)

つみにかくそむきはてける世の中をとくすてざりしことぞくやし

き

とかきてみやこへのぼせたりければ、とゞめをきしさいしども、いかばかりの事をかおひけん。

とあつて、本書の本文と百二十句本との間に前の「福原ノ使……」の例の如く、本書が百二十句本の影響をうけたと認むべきであらう。又鬼海嶋祝文の中に、

納受一々懇志、成經聖昭凌遠嶋配流苦、令付舊城花洛古郷、當改有無妄執清無爲眞理、然則結早玉兩(所)權現……。

とある。傍線を付した所は屋代本にはなく、百二十句本にのみ存する語で、覺一本にもなく、本書が百二十句本の影響をうけたものと認むべきである。又は屋代本がこれを脱したものと考へてもよいであらう。最後は彗星吏で、百二十句本にある徳大寺殿嚴嶋參詣の事がない。

以上卷二の屋代本との重要な差異を指摘したのであるが、細かい差異を見れば、屋代本と異なる語に百二十句本と一致するもののがかなり存在する。従つてこの巻は屋代本を轉寫したものではなくして、同類本として認むべきである。卷三は、巻頭、行綱回忠吏より大塔建立吏の、座主ノ宮二品并ニ牛車ノ宣旨ヲ申サセ玉フ

までは全く覺一本の本文である。以下は、

仁和寺ノ宮支ヘ申セ玉フニ依テ、御弟子法眼圓良法印ニナサル、中宮ハ日數經ニケレバ、六波羅ヨリ内ヘ參セ玉ヒケリ、太政入道ノ御娘后ニ立セ給シカバ、イカニモノ王子ヲ祈リ出シ位ニツケ奉リ、入道外祖ト仰ガレバヤトテ、先山王ニサマヅノ大願ヲ立テ、百日祈ラ

レケレドモ驗ナシ、我レ頼ミ奉ル神ニ祈リ申ントテ……。

とあつて、屋代本に類する。小松殿熊野參詣同夢想金渡之事以下に、福原へ馳下リ閉門メコソヲワシケレ、天性此大臣ハ未來ノ夏ヲモ兼テ知リ玉ヒタリケルニヤ

去ヌル四月七日ノ夢ニ見給ケルコソ不思議ナレ、譬ヘバ……(夢想の

事)兼康ハ神ニモ通ジタル者ニテ在ケリト乙人モ感ジ給ケリ、

我朝ニハイカナル大善根ヲシタリト云トモ、子孫相繼テ……(中略)

今ニ斷ヘズトゾ承ル、

燈籠并大地震事

摠テ此大臣ハ滅罪生善ノ御志シ……(中略)

此大臣ヲハ燈籠大臣トゾ入申ケル、

同十一月七日ノ夜戌ノ刻斗大地大ニ動テ……。

とある。この中、傍線を付した所は、全く覺一本と同文である。これは屋代本にはなく、前後の本文が屋代本と同類本である以上、覺一本又は同系本による増補と認めるのが自然であらう。百二十句本とは本文が甚しく相違する上に、百二十句本には無文の事が夢想の事に續いて存する。

以上によりてこの卷三は、覺一本と屋代本同類本との混成したもので、覺一本の如き平曲と八坂流の屋代本の如き平曲が同時に存在したことを證明すると共に、屋代本も覺一本の如きものに依つて補訂せられる跡を残したと認められ、屋代本が覺一本より前出とは斷言出來ない根據を示すものであらう。又細かい差異を見ると、百二十句本と一致する點もかなりあるので、百二十句本と屋代本とが近接して居り、

その上に覺一本が存したと推定せられるのである。例へば、大地震事に、

大地大ニ動テ(大地ヲヒタ、シク動テ、屋、覺、百)

坤儀經ノ説ヲ勘ルニ(坤儀經ノ説ヲ見候ニ、覺、屋、百)

不出日ト見ヘテ候(覺)(日ヲ不出、百、屋)

とあるによつても一端を窺ふことが出來よう。卷三に屋代本は小督事があるが本書にはない。この點、屋代本の方が後出の形態を示す所もある。最後に百二十句本と甚しく相違する所として一つあげておかう。大臣流罪夏に、

彼ノ大江山生野路ニカ、リツ、暫シハ丹波ノ村雲ト云處ニゾヲワシケル、其後能々定ラレテ信濃國ヘゾ流サレ玉ヒケル、此大納言ハ今様朗詠ノ上手、當時無双ノ大臣ニテ、法皇諸夏内外ナウ仰合セラレケレバ、大政入道、殊ニ怨ヲ結バレケルトカヤ、參議皇太后宮權大夫兼右兵衛督藤原光能卿、大藏右京大夫兼伊與守高階泰經朝臣、藏人右少辨兼中宮權大進藤原元親、此人々ハ三官トモニ留ラル、抑大政入道イカナル心ニテカ様ノ惡行ヲバシ玉フゾト云ニ、人申ケルハ當時關白ニ成リ玉ヘル二位中將殿ト前殿ノ御子三位中將ト中納言御相論ノ故トモ申ス、又或ル人申ケルハ、サラバ關白殿バカリコソイカナル御目ニモ合セ玉ハメ、四十餘人迄事ニ逢ベシヤ。

とある。

卷四は卷頭より鳥羽殿馳沙汰事に至るまでは、全く覺一本と同文である。但し若干覺一本と差があるがこれは差ともいへない僅少で、本書の誤脱とも認むべきである。例へば、カッコ内は岩波大系本、頁行を示す。

文持タル女（ふみもたる便女、二七六八）

寺井ニ着セ給ニ御迎イ（てら井につかせ給ふ。八日都へいらせ給ふに御む

かへ、二七七八）

目出度キ様ヲ紙二三マイニ（めでたき様を厚紙一枚ばかりに、二七八八）

とあり、長兵衛合戦事以下は全く百二十句本と同文である。若干の差

を示せば、百二十句本にも誤脱があるが、本書には、信連合戦の章

に、カツコ内は百二十句本、

○信連が候ト皆人が知テ候ニ（のぶつらが候に）

切テ回ル面ニ向フ者ナシ（きつてまはるにおもてをあはするものぞなき）

競の章に、

ヤガテ木ノ下ヲ六波羅ヘ遣サル、右大將此ノ馬ヲ引マワサセ〜見

ルベキ程ミテ（やがてこの下を六はらへつかはすとて、うたをぞ一しゆそへ

られける。

こひしくばきても見よかし身にそへるかげをばいかになちやるべきう

大しやうたの返しをばしたまはで、此むまをひきまはし〜見るべきほ

ど見て。覺一本、歌あり）

宮ヲス、メ進セタリケルトカヤ（みやをすゝめまいらせたりけるとかや。

これにつけても天がの人こまつどのゝ事をぞ申されける。覺一本、略同

文）

白葦毛ナル馬ノ大ナルガ名ヲバ（しらあしげなるむまのふとくたくまし

きが。覺一本、白葦毛なる馬の）

南都返牒の章に、

織延ノ一キレモ得ヌ我等サヘ薄恥ヲカク數ニ入哉

平家物語、鍋島本と平戸本

座主登山ノ然ルベカラザルノ由誘ヘ宣バ宮ノ御方ヘハ不定ノ由ヲゾ
申ケル

とある。百二十句本は、

をりのべのひときれもえぬわれらさへうすはぢをかくかずにいる

かな

さすどうしんして、をんじやうじ一みはしかるべからざるよしこ

しらへ給へば、みやのかたへはまいらざりける（覺一本ナシ）

とある。この外は極めて僅かの差であつて、何れを先出と決定すべき

所はないと云ふべきであらう。「戀しくば」の歌のないのは缺脱か、

又は後出と認むべきか。但しこの巻四が覺一本の本文と百二十句本の

本文とをあはせ持つことは極めて重要であつて百二十句本の存在と同

時に覺一本が存在したことを明示するものであらう。

巻五も百二十句本と殆ど同文であるが、百二十句本の都遷の章にあ

る、先蹤はなくして、

咲出ル花ノ都ヲ振捨テ、風吹ク原ノ末ゾ危ウキ

の歌の次に、

同六月八日福原ニハ新都ノ更始メ有ベシトテ上卿ニハ徳大寺左大將

實定卿……。

と續く。若干の差をあげると、月見の章に、

待タバ社深行鐘モツ、ラ、カラ、メ、飯ル朝ノ鳥ノ音ゾ憂キ（つらからめあか

ぬわかれの、百二十句本）

とある。咸陽宮の章に、

一重ノ羅縠ハ強クトモ引バ何ゾ不絶ト彈キ玉フ（られうのたもととはひ

かばなどかたえざらんとひき給ふ)

とあるのは、本書がよく、覺一本にも、「一條の羅敷はつよくともひかばなどかたえざらんとぞひき給ふ」とある。一條は一重がよい。新院再嚴島御幸の條に、

去ル三月ニモ御幸在テ其故ニヤ一、兩年ノ程ハ靜ニメ(さんぬる三月にも御かうあつて、そのゆへにやはんねんばかりはしづかにして)

とあるのは、本書の傍書にもある如く、「一兩月」とある覺一本によつて、年は月の誤である。續く「高倉宮ノ御幸」は、「御謀叛」の誤である。次に富士川の章では、百二十句本には、經正竹生嶋詣があるが本書にはなく、

後陣ハ未ダ手越宇津屋ニ支ヘタリ、大將小松權亮少將侍大將上總守忠清ヲ召ノ……。

とあるが、その中に、
或ハ頭ヲ蹴破レ、或ハ腰ヲ蹈折ラレテ叫喚者モ有、或ハ大幕取テ參ル者モアリ

とあつて、數行に及ぶ脱文がある。その他に極めて僅かの脱字がある。又百二十句本の誤脱を訂正すべき所もある。以上によつて卷五は百二十句本と同一といつて差支がない。

卷六も前述の如く大略は百二十句本と同文と云へようが、章によりて差異の多い所がある。新院崩御の章に、

一院仰成ケルハ吾十善ノ餘薰ニ依テ萬乘ハ實位ヲ保ツ、嗣代ノ帝王ヲ思フニ、如何ナレハ万機ノ政務ヲ停メラレテ歲月ヲ送ルラントゾ御歎アル

百二十句本には、

ほうわう仰なりけるは、しだいのていわうおもへばこなりまこなりいかなればせいむをとめられて、とし月を、くるらんとぞ御なげきありける。

とある。覺一本には、「われ十善の餘薰によつて萬乘の實位をたもつ」も、「子なり孫なり」も、「ありける」もある。

有爲無常ノ習ナレバ理リ過テゾ覺ヘケル、御歳廿一、内ニ八十戒ヲタモチ外ニハ五常ヲ不亂ノ……。

とあつて、百二十句本、覺一本の有する澄憲の歌や右京大夫の歌がない。小督の章のみは、他の章と異りて、全般に差異がある。これは、屋代本卷三の小督の章と殆ど同文である。即ち一端を示せば、

其比中宮ノ御方ニ小督殿トテ勝タル美人箒ノ上手候ワレケリ、主上夜ナノ召ル、是ハ櫻町中納言成憲卿ノ女也、此ノ女房ト申ハ、冷泉大納言隆房卿ノ未ダ少將ナリシ時見初メ玉ヘルナリ……ト打詠ゼサセ玉フ所ニ、仲國御返事ヲゾ進セタル、御感アリ、サラバ今仰付クベキ者モナシ、ヤガテ汝召メマイルト仰ケレバ、仲國大政入道ノ飯リ聞玉ハン所ハ怖シケレ共、是レ綸言ニテアル間、牛車牛飼ナンド清ゲニ沙汰シ嵯峨ヘ行向ヒ、御迎ニ參リテ候ト申ケレバ、小督參ルマジキ由頻ニ宣ケレドモ、様々誘申メ、車ニ取乗セ奉リ、内裡ヘ飯リ參リタリケレバ、主上幽ナル處ニ忍バセテ夜ナノ召レケルホドニ、姫君一人出來サセ玉ヒケリ、坊門ノ女院ノ御事也、大政入道如何カシタリケン此事洩聞ヘテ……。

恐らく屋代本の如き一章を入れたものであらうか。従つてこの小督の

章の後に、

主上戀慕ノ御思ヒニ沈マセヲワシマス、法皇御歎ノミ打ツゞキ御悲
ゾ隙ナカリケル

とあるのは、百二十句本には、「法皇」の前に小督の章があつて、覺一本と同じ接續であるので、本書の前後の接續が誤りである事が分るのである。經島、祇園女御の事とあつて、次に慈心坊炎魔廳屈請吏（慈心坊）、次に流砂葱嶺事がある。殆ど百二十句本と同文である。

種々ノ御讀議（しゅくくの御せんぎ）

我宗ニハ三藏ヲ立、一代ノ聖教ヲ収、三藏ト者（わがしうには三ざうをたつ、三ざうといつば）

文證ヲ引玉フ、其數繁多也（もんしうをひき給ふ事はんたなり）

心ニ觀念ヲ凝シ（くはんねんをこらし）

驚愕メ地ニ臥シ（おどろきちにふす）

上皇是ヲ聞召シ（しやうくはうきこしめし）

やがて明日御幸（みやう日の御かう）

とあつて、百二十句本の誤脱を訂正すべき點もある。五條大納言邦綱逝去吏には、

淨行持律ノ僧ヲワシキ、昌泰ノ頃、寛平、法皇、大井河へ御幸有シ、ニ、觀修寺内大臣……。

とあるが、百二十句本には、
じやうぎやうぢりつのそうおはしき、くはんじゆじのないだいにじん……。

とあり、本書は覺一本と略同文であつて、百二十句本の誤脱である。

平家物語、鍋島本と平戸本

但し國會圖書館藏本には誤脱がない。

以上によつてこの卷は小督の章以外は百二十句本と同文といつて差支がない。

卷七も、大略は百二十句本と殆ど同文であるが、小松三位中將維盛已下人々北國討手發向之吏（北國下向）の章の次に、皇后宮亮經正竹生嶋參詣吏がある。百二十句本は卷五に入つてゐる。覺一本によつて考へても、この形態が原形である。しかしその本文は殆ど同文である。

心ヲ澄シ湖ノ倚テハカヘル渚ニ打出（心をすましみづうみのみぎはにう澳ノ方へ小嶋（おきにこじまの）
ちいでん）

藤兵衛有範（とうひやう衛のじ、うありのり）

郭公ノ初音床シキ時スカラ松ニ藤ナミサキ亂レ、ゲニ面白カリ梟

（はつねゆかしきほととぎす、おりしりがほにつげわたる、まつにふちなみさきみだれ、まことにおもしろかりし事どもなり）

覺一本も、「初音ゆかしき郭公、おりしりがほにつげわたる、まことにおもしろかりければ」とあり、本書は覺一本とは一步遠ざかつて居る。流動したものであらうか。

御前ニ參テツイ居テ（まへにつゐひざまづるて）

タノモシキ事ニ候トテ（たのもしふこそ候へとて、覺一本同文）

越前國火打城合戰吏以下は百二十句本と差がないといつてもよい。木曾義仲山門牒狀吏の章、山門の返牒の中に、

祭奠之神明、定悦教法之再榮、隨喜崇敬之復舊（さいてんのしんめいさだめてぶくせん事をすいき）とあつて、本書は覺一本と合致し、百二十句本の誤脱を補ふ所もある。平家之一門山門願書吏、平家の願書に

は連署がある。屋代本にはない。

平ラカニ花咲宿モ年経レバ西へ傾ク月ト社ナレ

大衆是ヲ見テ眞ニサコソハト哀ミケレドモ既ニ源氏ニ同心ノ返牒ヲ
送ル上ハ……。

とあるが、百二十句本は、歌の次に、

さんわう大しあはれみをたれ給へ、三千の大しゆちからをあはせよ
となり、されどもとしごろ日ごろのふるまひしんりよをそむき、人
ののぞみにもちがひければ、いのれどもかなはず、かたらへどもな
びかず、大しゆこれを見て、まことにさこそとはあはれみけれど
も……。

とあつて、覺一本に略同文であつて、本書は誤脱であらうか。忠度都
落の次に、經正の都落、青山沙汰がなく、

其身朝敵ト成シ上ハ子細ニ及バズトハ云ナガラ口惜カリシ更ドモナ
リ

其中ニ小松三位中將維盛ハ日比ヨリ思儲ケタリシ更ナレドモ、指當
ハ悲シカリケリ、此北方ト申ハ、故中御門新大納言成親卿ノ御姫ナ
リ、此腹ニ六代御前トテ十歳ニナラセ玉フ若君ヲワシマス、夜叉御
前トテハニナラセ玉フ姫君マシマス、此ノ人々後レジト……。

とある。夜叉御前の事は百二十句本は脱してゐる。覺一本には存する
「此ノ人々」とある以上は當然あるべきである。又其中といふ語は接
續上、穩當でない。これは八坂流本が叙述の順序を變更した爲にかう
なつたものであらうか。平家一門都落の條、

平大納言時忠、南無飯命頂禮正八幡大菩薩、然ルベクハ君ヲ初メマ

イラセテ、我等ヲ今一度都へ皈シ入レサセ玉ヘト泣々申シケルコソ
悲ケレ、各々後ヲ顧ミ玉ヘバ霞ル空ノ心地ノ、烟耳心細ゾ立昇ル、
平中納言教盛、

ハカナシヤ主ハ雲井ニ別レバ宿ハ烟トタチノボルカナ

修理大夫經盛、

古サトヲ燒野原ト歸見テ未モ烟ノ濤路ヲゾユク

實ニ古郷ヲバ一片ノ烟塵ニ隔ツ、前途万里ノ雲路ニ被越ケル、人
々ノ心中左社ハマシマシケメト推量レテ哀也

肥後守貞能ハ河尻ニ源氏ドモガ向フタリト聞テ……。

とある。百二十句本には、

なくく申されけるこそかなしけれ、ひごのかみさだよしはかはじ
りにけんじ共がむかふたりときひて、けちらさんとて……。 (中略)

うしろをかへりみて、さらにさきへはすゝまざりけり、をのくうし
ろをかへりみて、みやこのかたはかすめるそらの心ちして、けぶり
のみ心ばそくぞたちのぼる、その中にしゆりの大夫つねもり、みや
こをかへり見給ひて、なくくかうぞの給ひける、

ふるさとをやけ野のはらとかへりみてすゑもけぶりのなみちをぞ
ゆく

さつまの守たゞのり、

はかなしやぬしはくも井にわかるればあとけぶりとなちのぼ
るかな

まことにふるさとを一本のゑんちんにへだて、ぜんとばんりのく
もちにおもむき給ひけん、人々の心のうちこそかなしけれ。ならば

ぬいそべのなみくら……。

とある。覺一本の本文の叙述の順序は、本書と同様である。百二十句本は後出である。然るに、本書の本文が覺一本に殆ど同一であるのは、覺一本の本文が補入せられたものであらうか。これは勿論、「左社ハマシマシケメト」と増補があるによつても、平曲による補入であらう。本書は百二十句本と少し異りて、後の叙述は、

只後ロヲ而已顧テ、更ニ前エハ進ザリケリ、各後ヲ顧テ都ノ方ハ霞メル霄ノ心地ノ、前途万里ノ雲路ニ趣キ玉ヒケン人々ノ心ノ中コソ悲シケレ、習ワヌ磯邊ノ浪枕……。

とあつて、重複した語の出てゐるのは、百二十句本を改訂した跡を残してゐると謂ふべきであらうか。

以上卷七について言へば、經正都落の章の、ない、他は、大略百二十句本と差異がないが、一部に覺一本の影響によつて改訂した跡があるのによつて、百二十句本よりも後出と認むべきであらう。

卷八も又百二十句本と同類本である。然し所によつてはやや覺一本に近い所がある。例へば、宇佐行幸夏のはじめに、

左有程ニ筑紫ニ可造内裡由沙汰有シカドモ未都モ不被定、主上ハ岩戸小卿大藏種業ガ宿所ニ渡セ給、人々ノ家ハ野中田中ナリケレバ。

とある所は覺一本に略同文であるが、以下は、

社頭バ月卿雲客ノ居所ニ成リ、回廊ハ五位六位ノ官人、庭上ニハ……七日御參籠ノ明カタニ大臣殿御夢想ノ告ゾ有ケル、御寶殿ノ御戸扉優渌ク氣高ゲナル御音ニテ、

世ノ中ノウサニハ神モ無物ヲ何祈ラン心盡シニ

平家物語、鍋島本と平戸本

大臣殿打響キ胸打騒、左有トモト思心モ虫ノ音モ弱終ヌル秋ノ葉カ
ナト云古歌ヲゾ心細氣ニ口荒玉ヒケル、左有テ太宰府へ還幸奉成、
左有程ニ九月モ十日餘リニ成ニケリ、荻ノ葉向ノ夕嵐、獨丸寝ノ床
ノ上……。

とあつて、傍點を付した所は百二十句本に同じく、傍線を付した所は覺一本に同じと言ふ複雑な本文である。これは一面覺一本の影響をうけて百二十句本が變移したとも認められし、又一方百二十句本のより古き形態とも考へてよい。次にある歌の順序は、百二十句本が、覺一本と同じく、忠度、經盛、經正の順であるが、本書が經盛、忠度、經正の順である。次に緒方惟榮変に、

足手ニハ大ナル砥ヒマナク切テケレバ、人是ヲ砥大太トゾ申ケル、
彼ノ緒方三郎ハ砥大太ガ五代ノ孫ナリ、カ、ル怖シキ者ノ未ナリケ
レバ、九國二嶋ヲモ吾一人ノ打取ラバヤナンド常ハオウケ変ヲゾ荒
猿ケル。

とある。百二十句本には、
ひますきまもなくきてたえざりければ……ふしぎなるものゝすゑ
なり……つねは申ける。

とある。平家太宰府落変は百二十句本と甚しく異りて、本書は、
水城戸ヲ出テ、住吉ノ社ヲ伏拝ミ、徒歩眺ニテ我レ先ニ……ト箱崎
津ヘコソ落玉ヘ、折節降ル雨車軸ノ如ク、吹風沙ヲ上グルトカヤ、
落ル涙降ル雨分キテ何レモ見ヘサリ鼻、彼ノ玄舁三藏ノ流沙葱嶺ヲ
凌レケン苦ミ、是ニハ過ジトゾミエシ、サレドモソレハ求法ノ爲ナ
レバ來世ノ頼モ有ケン、是ハ怨敵ノ故ナレバ、後世ノ苦ミ且ツ思

フコソ悲シケレ、新羅百濟高麗契丹迄モ落行心バヤトハ思ヘドモ、浪風向フテ叶ワネバ、兵藤次ニ具セラレテ山鹿城ニゾ籠ラレケル、山鹿ヘモ敵ヨスルト聞ヘシカバ、海士ノ小舟ニ取乗テ夜モスガウ豊前國柳浦ヘゾ渡リ玉フ、去程ニ九月十日餘ニ成ニケリ、荻ノ葉ムケノ夕嵐シ、獨リ丸寝ノ床ノ上、片敷袖ヲ絞リツ、更行空ノ哀サハ早晩モト云ナガラ、旅ノ空コソ悲シケレ、十三夜ハ殊ニ名ヲ得タル月ナレバ、小松殿ノ三男左中將清經ハ、月ノ夜ヲ澄シツ、船ノ屋形ニ立出テ、何変ニモ思入玉ヘル人ニテ、心ヲ澄シ笛ノ音取ノ朗詠メ來方行末ノ変ドモ宣ヒツツケテ……

とある。百二十句本には、「彼ノ玄辨」の前にも、「新羅百濟」の前にも文がある。後の方は覺一本には存しない。又右の文の傍線を付した所は重出である。然しこれは屋代本の本文と略同文である。これに就いて熟考するに、これは、屋代本の如き本文が平曲として一方に存在したことを示すもので、百二十句本より一方では屋代本の本文へと變動し、つゝあつた現象を明示するものではなからうか。屋代本が、十三夜ハ殊ニ名ヲ得タル月ナレ共、其夜ハ都ヲ思出ル涙ニ我カラ曇リツ、サヤカナラズ、薩摩守忠度、

月ヲ見シ去年ノ今夜ノ友ノミヤ都ニ我ヲ思ヒイツ覽
左馬守行盛、

君スメバ是モ雲井ノ月ナレド猶戀敷ハ都ナリケリ

小松殿ノ三男左中將清經ハ月ノ夜心ヲスマシツ、船ノ屋形ニ立出テ……

とあるのは混亂した本文といふべきである。(本學人文論集第二號、拙稿

二七頁參照)。この章の最後に近く、

柳浦ニ内裡造ルベキ議定アリシカドモ、分限ナケレバ造ラレズ、宇宙ノ心地ノタ、エ、ル計ナリ、長門國ハ新中納言知盛ノ國ナリケリ。とあるが、百二十句本には、

やなぎのうらにだいいりつくるべきせんぎありしかども、ぶんげんなければつくられず、又ながとよりよするときこえしかば、又あまのをぶねにのり、うみにぞうかび給ひける、ながとの國はしん中なごんともりの國なりけり。

とある。以下百二十句本と異なる所をあげると、院御使康貞鎌倉下着変(征夷將軍院宣)に、

我身ハ高麗縁ノ疊ヲ布キ、御簾ヲ半ニ揚テ、安貞ニ對面アリ、布衣ニ立烏帽子、顔長勢短カリケリ、容白優ニノ言語分明ナリ。

とあるが、百二十句本には、
わかがみはかうらいべりをしき、みすをなかばにあげてやすきだにたいめんあり、ひやう衛のすけどのはかほ大きにせいひきかりけり、ゆうがんゆうにしてごんごぶんみやうなり。

とある。覺一本には、

うへは高麗縁の疊をしき、御簾たかくあげさせ、兵衛佐どの出でられたり、布衣に立烏帽子也、白大にせいひきかりけり。容白悠美にして言語分明也。

とある。本書の本文と比較するに、百二十句本と異り、覺一本と一致する所のあるのは覺一本の影響であらうか。勿論この文の前後はすべて百二十句本と同一である。木曾猫間中納言對面変に、本書は、

飯時ニヲワシタルニ只ヤアルベキ、無鹽ヤアル、平茸ヤアル、疾々ト急せケリ、禰ノ井小彌太ト云モノ出來テ配膳ス。

とある。百二十句本には、

めしとぎにおはしたるにたゞやあるべき、なにもあたらしきはぶえんといふと心ゑて、こゝにぶえんのひらたけやある、とくゝといそがせけり、ねの井のこやたといふものゝいそぎてはいせんす。

とある。本書に誤脱があらうか。前後は全く百二十句本と同一である。水嶋合戦変に、

木曾殿是ヲ聞、ゲニ剛ノ者ナレバ具ノ下テ案内者サセヨトゾ宣ケル。

百二十句本は、

木曾殿これをきゝ、きやつはかうのものとときくがおしければ、いけをきたるなり、ぐしてくだりてあんないしやさせよとぞの給ひける。

とある。覺一本は、

木曾殿、神妙の事申ござんなれ、さらば汝妹尾を案内者にして先づ下れ……。

とある。又同章に、

今井申ケルハ、左候へバコソ眼ノ様骨柄只物トモ見へ候ワズ、サシモ切せ玉フベキモノヲト申せば、木曾、剛ノ者ト聞シユエニコソ今迄キラデ置ヒタリツレ……。

とある。百二十句本には、

いま井申けるは、さ候へばこそまなこのやうけのものと見候ひしあ

ひだ、さしもにきらせ給へと申せし事はと申せば、木ぞ、かうのものとときくがおしきにこそいまゝできらでをきたりつれ。

とある。この前後は百二十句本と同文である。覺一本は、

今井の四郎申けるは、さ候へばこそ、きやつがつらたましめたゞものとは見候はず、ちたびきらうど申候つる物を、助けさせ給てと申す。

とある。同章に、

山韮ニ守狩^ス候三ツ四ツサシタ者モアリ、柿ノ直垂^{ツメダスキ}ニ爪紐^{ツメダスキ}シタリ。

とあるが、百二十句本には「柿ノ」以下はない。

法住寺殿木曾奉寄変に、

御所ニ火ヲカケタリ、折節風猛吹テ黒烟推懸タリ。

とあるが、百二十句本には「折節……」がない。覺一本には、「おりふし風はげしゝ、猛火天にもえあがて、ほのほ虚空にひまもなし」とある。又本書に、

木曾左馬頭ハ院内取奉テ、院ニカ成マシ、内ニカナラマシ、院ニ成ント思へバ法師ニ成ンモ咲シゝ、内ニ成ント思へバ童ニ成ンモ不氣色、ヨシゝ關白ニ成ントゾ云ケル、大夫房覺明申ケルハ、關白ハ藤原コソ成せ玉ヒ候ナレト申ケレバ……。

とあるが、百二十句本には、

木ぞさまのかみらうどう共をめしあつめて、そもゝよしなか十ぜんのきみにむかひたてまつり、いくさはかちぬ、しゅじやうにやならまし、ほうわうにやならまし、しゅじやうにならんと思へばわらはにならんもしかるべからず、ほうわうにならむとおもへばほうし

にならんもおかしかるべし、よし／＼くはんばくにならんとぞいひける、たいふかくめいすゝみいで、申けるは、くはんばくはたいしよくくはんの御すゑしつべいのきんだちこそならせ給ひ候なれと申ければ……。

とある。この前後は百二十句本に同文である。百二十句本が覺一本に近似し、本書は簡略である。これは簡略化せんとする平曲の一性格を示すものである。以上の巻八の本文の現象を見るに、百二十句本と同類と認むべきではあるが、一部には覺一本に近似する所があり、又屋代本に類する所があつて、百二十句本よりも後出と認むべきであらうか。

巻九も又大略は百二十句本と同類本であるが差異がかなり存在する。主要なものをあげよう。摺墨活食之夏に、

日來ハ都ヘ上テ木曾殿ニ聞ル今井樋口トカヤニ組ンデ死ヌルカ左ナクバ、平家ニ組ンデ死ナントコソ思ツレドモ其レモ今ハ詮ナシ、爰ニテ佐々木待請ケ引組デ落サシチガヘ、鎌倉殿ニ損トラセ奉ンズル物ヲト思切テ待處ニ、佐々木何心モナク歩セ來ル、推並テヤ組ン、向フサマニヤアテ落サンズナンド思ヒ煩フ、サルニテモ一言問テ組ント思ヒ、イカニ佐々木殿、御邊ハ活食玉ワラセ玉ヒテケリト詞ヲカク、佐々木誠ヤ此ノ人所望仕リタル由内々承リツル物ヲト急ト思出テ、チツトモ騒ガズ打笑テ、ヤ殿ノ玉ワラヌゾヨ、宇治川渡スベキ馬ハモタズ、御祕藏ノ御馬ナレバ、申トモヨモ玉じ、何カ苦シカルベキ、盗ント思テ伺ツルホドニ、既ニ曉立ントテノ夜便宜ヨク盗ミスマメ上ルゾト云ケレバ、梶原此詞ニ腹ガ居テ……。

とある。百二十句本を示せば、

日ごろはみやこへのぼりて、木そどの、御うちにて四天王ときこゆるいま井、ひぐち、たてねの井にくんでしぬるか、しからずはさいこくへむかつて一人たうせんとときこゆる平家のさぶらひといくさしてしなんとおもひつれども、それもせんなし、こゝにてさゝきとくんでさしちがへ、よきさぶらひ二人しんでかまくらどのにそんとらせたてまつらんずるものとつおやひて、まつところに、さゝ木の四郎なに心もなくあゆませていできたる、をしならべてくまん、むかふさまにやあておとさんとおもひけるが、まづことばをかけてくまんとおもひ、いかにさゝきどのはいけずき給はらせ給ひてけりといひければ、さゝ木まことや此人もしよまうつかまつりたるよしないうき／＼し物をときつとおもひいで、ちともさはがず、さ候へばこそ此御大事にまかりのぼるが、うちがはわたすべきむまはもたず、いけずきを申さばやおもひつれども、かぢはらどの、申されけるにも御ゆるしなしとろけたまはるあひだ、ましてたかつなが申共よもたまはじとぞんじ、ごにちの御かんだうはあらばあれとおもひ、あかつきたつとての夜、とねりに心をあはせ、さしも御ひざう候いけずきをぬすみすましてのぼるはいかにといひければ、かぢはら此ことばにはらが居て……。

とある。前後は百二十句本と同一であるのに本書がこの所のみ簡略であるのは如何なる理由があるのであらうか。百二十句本は略覺一本に近似する。これは本書を百二十句本の如くするには覺一本の存在を認めねばなるまい。従つて覺一本を基として、百二十句本へ、それより

本書へと流動したと説明すれば、本書と百二十句本との類似も説明が出来るし、又百二十句本を簡略して本書の如く推移したものと認めれば極めて自然に解決がつくのではなからうか。筆者の覺一本を最古として、百二十句本へ、それより屋代本へといふ假説が破綻なく適用せられるならば、筆者の平家物語の本文の流動の鐵則が確立するのである。宇治川合戦之夏に、

鎧ノ毛モ定ナラズ兵ドモ河ニ打向ヒ、イカゞセントテ拽タリ、畠山床司次郎進出テ申レケルハ、此ノ河ノ面ヲ見ルニ馬ノ足ノ及バザラシ所三段ニハヨモ過ジ、近江ノ湖ヨリ出タル河ナレバ、待共々々水ヒマジ、此河ノ定メハ兼テ鎌倉殿ノ御前ニテサシモ御沙汰候シ夏ゾカシ、今始タルコトナルニコソ、治承ノ合戦ノ時、足利又太郎ガ渡ケルハ神力佛カ、物ガマシ、重忠瀕踏仕ラン、武藏ノ殿原續ケヤトテ……。

とあるが、前後は百二十句本と同一である。百二十句本には、

よろひのけもさだかならず、大しやうぐん九郎御ざうしかはばたうちいで、水のおもてを見わたり、人々の心を見んとやおもはれけん、いかゞせん、よどいもあらひやまはるべき、水のおちあしをやまつべきとの給へば、むさしの國のちう人、はたけ山しやうじ次郎しげたゞ、そのときはいまだ廿一なりけるがすゝみいで、申けるは、此かはの御さはかまくらどの、御まへにてよく候ひしぞかし、ひごろしろしめさぬうみかはのいまにはかにいできても候はゞこそ、此かはあふみのみづうみのすゑなればまつともく水ひまじ、又はしをばたれかはわたしてまいらすべき、一とせぢしうのか

つせんにあしかゞの又太郎たゞつなは十八さいにてわたしけるはおにがみにてはよもあらじ、しげたゞせぶみつかまつらんとて、むさしのとのばらつゞけやとて。

とある。百二十句本は覺一本に近似する。本書は極めて簡略である。百二十句本の傍線を付した所は本書には存しない。これは前の例と同じく本書の一特質である。平曲の流動中、簡略化の現象であらう。義仲討死之夏に、

増テ中有ノ旅ノ天想像コソ哀ナレ、七騎カ内ニ巴ト云女武者ゾ有ケル、其比齡廿二三也、大力ノ強弓ノ精兵、究竟ノ荒馬乗ノ惡所落シ……。

とあるが、百二十句本には、

ましてちううのたびのそらおもひやるこそあはれなれ、木ノ殿はしなのよりともへやまぶきとて、二人のびぢよをぐせられたり、やまぶきはいたはる事ありてみやこにとゞまりぬ、ともえは七きがなかなでもうたれざりけり、そのころよはひ廿二三なり、いろしろくかみながく、ゆうがんまことにびれいなり、されども大ぢからのつよゆみ、せいびやうくきやうのあらむまのりのあくしよおとし……。

とある。これも前例と同様である。一谷合戦夏(三章勢揃)に、

二位僧都全身ハ梶井宮ノ御返夏ニハ、旅ノ空思ヒヤル社心苦シケレ、都モ未靜ナンドコマトト遊サレ、奥ニ一首ノ歌ゾ有ケル人シレズソナタヲ忍心ヨバ傾ク月ニタゲヘテゾヤル

とある。これも百二十句本に比して誤脱があらう。熊谷平山合戦の條に、

小次郎ハ澤瀉ヲ一摺々タル直垂ニフシナワ目ノ鎧キテ、黄瓦毛ナル馬ニゾ乗タリケル、馬ハ西樓トテ白鶴毛ノ逞ニ乗り、黄陳ノ直垂ニ小櫻ヲ黄ニカヘシタル鎧ヲ着ゾ旗差シケル、主従三騎打連テ……とあるのも混亂がある。百二十句本に、

よろひきてきかはらげなるむまにぞのつたりける、はたざしはきぢんのひたゝれにこざくらをきにかへしたるよろひきて、せいろうといふしらつきげなるむまにぞのつたりける。しうぐ／＼三きうちつれて……。

これを覺一本に比するに、覺一本に、小次郎が西樓といふ白月毛の馬に乗り、旗差が黄河原毛の馬に乗つたとあるのを百二十句本が誤つて右の如くし、本書がいよいよ不明にしたものであらう。小松殿末子師盛最期の次に、

但馬前司經雅ハ河越小太郎重房ガ手ニ懸テ討レ玉ヒヌ、門脇ノ平中納言敦盛末子藏人太夫業盛ハ……。

とあつて、脱文がある。(覺一本巻九、二二二頁7・8行参照)。
次に敦盛最期の條に、

狂言綺語ノ理ト云ナガラ終ニ讃佛乗ノ因トナルコソ哀ナレ、去程ニ敦盛ノ御形見澳ナル御船ニ送奉ラバヤトテ、最後ノ時召レタル御裝束以下一モ残サズ取副テ牒狀ヲ書テ修理大夫殿ヘ奉ル、其牒ニ云ク、

とあるが、百二十句本の長文に比して簡略である。百二十句本は、きやうげんきゞよのことほりといひながらつめにさんぶつじうのいんとなるこそあはれなれ。さてくまがへは夜もすがらあつもの

事なげきかなしみけるが、つく／＼ものをあんずるに、いとをしやこの君と申は、くはんむ天わうだい五のわうじ一ばんしきぶきやうかつらばらのしんわうに九だいのこういん、さぬきのかみまさもりのこ、ぎやうぶきやうたゞもりのあそんのちやくなん、きよもりの御しやてい、しゆりの大夫のすゑのこなり、いまだむくはんの人に、太夫あつもあり、しやうねん十七さいになり給ふ、うちたてまつるときのあるさま、いつのよにかはわすれたてまつるべき、なをざねがちやくし小次郎なをいゑ、むさしよりはる／＼つれのぼり、みやこにて、さんぬる正月廿日木そ殿うたれ給ひしときのかつせんに、みかたあまたうたれしかども、さういなかりしに、小次郎しやうねん十六さいになりつるを、けさ一のたにの大てててきのやさきにかかりつる、しがいを又も見ぬおもひ、しゆりの太夫殿の御なげき、なをざねがかなしみいづれかをとりまさるべき、あまりのおもひのかなしさに、あつもの御かたみ、おきなる御ふねにたてまつらばやとて、さいごのときめされたる御いしやうよろひいげのひやうぐども、一ツものこさず、御ふえまでもとりそへて、ちうじやうをかきそへ、つかひにうけとらせて、せうせん一そうしたてい、御ふねしゆりの大夫殿へたてまつりけり、そのちうじやうにいはいく……。

とある。傍線を付した所は本書の脱したものであらう。巻末は、通盛女院ヨリ此女房ヲ賜テ最愛セラレ梟、不淺契リニテ憂カリシ波ノ上船ノ中マデモ引具メ終ニ同道ニ趣カレケルコソ哀ナレとあるが、百二十句本は、

みちもりねうみんより此女ばうを給はつて、いとおもんぜられけり、見めはさいはひの花なれば、あさからずちぎりと、うかりしなみのうへふねのうちまでもひきぐして、つみにおなじみにおもむかれけるこそあはれなれ、かどわきの中なごんのりもりのきやうは、ちやくしゑちぜんの三ゐ、すゑのこなりもりにをもくれ給ひぬ、いまはたのむ人としては、のどのかみのりつね、そうには中なごんりつしちうくはいばかりなり、こ三ゐのかたみとも此女ばうをこそ御らんすべきに、これさへかやうになり給へば、いとゞ心ばそくぞなられける。

とある。これは覺一本と略同文である。

以上によつて、この巻九は百二十句本の同類本とはいふべきながら、簡略なる記述を有するによつて、後出と認むべきであらう。唯僅かの本文の差異中には、百二十句本よりも覺一本に合致する語もある。卷十も百二十句本と略同類本である。重衡六條東被渡吏に、

定長此ノ様ヲ奏聞ス、法皇聽テ院宣ヲゾ下サレケル、北方大納言典侍殿ヘモ御詞ニテ被申ケリ、旅ノ空ニテモ人ハ吾ニ慰ミ、我ハ人ニ慰奉シニ、引別テ後如何ニ悲フ思ボス覽、契ハ朽セヌ者ト申バ、後ノ世ニハ必生逢奉ント泣々言傳シ給ヘバ重國モ泪ヲ押テ立ニケリ、此三位中將年來被召仕ケル右馬允知時ト云者有……、(内裏安房)左有バ中將南都ヘ被渡テ被切玉ヌト聞ヘシカバ、聽テ様ヲ替テ如形ノ佛更ヲ營ミ後世ヲゾ訪玉ヒケル
内侍所可入洛之由屋嶋ヘ御使下吏

左有程ニ平三左衛門重國御坪召繼花形屋嶋ニ參リ院宣ヲ獻ル、大臣

已下平家一門ノ公卿殿上人寄合玉テ院宣ヲ被披ケリ
一仁先帝出金闕鳳曆臺幸諸州然間三種神器……。

とある。傍線を附した所は覺一本の本文である。百二十句本には存しない。又この中間に内裏女房の事があるが、これは一方流本(覺一本)の影響でこの順序にしたものと思はれる。内裏女房の事の本文も、前半は、

此三位中將ノ年末被召仕ケル右馬允知時云者有、八條ノ女院ニ候ケルガ、土肥次郎ガ許ニ行ヒテ、中將殿ノ先年召仕レ候シ某ト申者デ候ガ、西國ヘモ御供可仕ノ由存テ候士敷トモ、八條ノ女院ニ兼參ノ者デ候間、不及力京都ニ罷留テ候ガ、今日大路ニテ奉見候ヘバ目も不被當……(中略)

知時内裡ヘ參タリケレバ、晝ハ人目モ繁ケレバ、其邊近小屋ニ立入テ日ヲ待暮シ誰ソガレ時ニ紛入テ局ノ下口ノ邊ニイテ聞ケレバ……とあつて、殆ど覺一本に近い本文である。後半は百二十句本と同文である。重衡戒文の條の最後は、

上人是ヲ請取テ懷ニ入レ涙ヲ押ヘテ出玉フ
重衡關東下向吏

鎌倉右兵衛佐頼朝頻ニ申ケレバ……。

とあるが、百二十句本には、
しやう人これをうけとりてふところにいれなみだををさへていで給ふ、此すゞりはしんぶにう道しやうこくしやきんをおほくそうてうのみかどへたてまつり給ひたりければ、へんぼうとおぼしくて、日ばんわだの平大しやうこくのもとへとてをくられ給ひたりけるとか

や、八でうのねうみんにむくうまのじうまさときといふさぶらひあり。

とある。これも本書の誤脱であらうか。覺一本には存する。覺一本の最後にある「名をば松蔭とぞ申ける」は百二十句本にない。

重衡關東下向支には、

濱名ノ橋ヲモ過ケレバ池田宿ニゾ着玉フ

とありて、百二十句本にある、

まつこのずゑにかぜさえて、いりえにさはぐなみのをと、さらでも
たびは物うきに、心をつくすゆふまぐれ(覺一本あり)

が脱し、「古郷モ戀シクゾナキ旅ノ空」の歌の次は、

三位中將矢差モ讀タル者哉、此歌ノ主ハ如何ナル者ゾト御尋有ケレバ、景時申ケルハ、君ハ未知食候ワヌヤ、屋嶋ノ大臣殿ノ當國ノ守護ニテ渡ラセ玉ヒシ時被召マイラセテ御最愛ニテ候シガ、老母ヲ是

ニ留置テ。

とあつて、百二十句本よりも覺一本に近く、重衡頼朝對面支に、

量リナキ罪業ニテ社ト宣バ、中將一門運盡テ都ヲ既ニ落シ上ハ、骸

ヲ山野ニ曝シ江海ニ沈メベシトコソ存候ツレ、是マデ下ルベシトハ

思ヒヨラズ、只宿業社口惜候ラヘ、殷ノ紂ハ夏臺ニ囚レ、文王ハ脯

里ニ捕ワルト云本文アリ、上古尙如此、況於末代乎、弓矢取身ノ敵

ノ手ニ捕ワレテ命ヲ失コト全ク重衡一人ガ非恥、只芳恩ニハトク

く頸ヲ刎ラルベク候ト宣テ……。

とある。屋代本に近く、百二十句本の長文に比して本書は簡略である。この所は百二十句本が覺一本と略同文である。然るに傍線を附し

た所は、百二十句本屋代本になくして、覺一本に存する語である。これは恐らく覺一本の如き平曲の影響であらうか。

維盛入水の條に、

泣々取留ケレバ船底ニ伏シ鳴キ叫ブ哀斜ナラズ、聖モ餘リノ悲サニ
墨染ノ袖ヲゾ絞リケル。

とある。この前後は百二十句本と同一である。百二十句本は、

なくくとりとゞめければ、ふなぞこにたふれふし、なきさけぶ事
なのめならず、ものによくくたとふれば、むかししつたたいしだ
んとくせんにいらせ給ひしとき、しやのくとねり、こんでいこまを
給りて、わうきうへかへりけんかなしさもかくやとおぼえてあはれ
なり、ひじりもあまりのかなしさにすみぞめのそでをしぼりける。

とある。これは覺一本と略同文である。唯、「ものによくくたとふれば」といふ語のみは後の増補であらうか。

以上で卷十の著しい差は述べたのであるが、細かい點を比較すれば百二十句本の誤脱を補ふ點もかなりある。しかし前述の如く、覺一本を以て補つたとすれば學的には高く評價出來ないであらう。最後に元曆改元之変を引いておかう。

其比改元有元曆ト號ス、左有程ニ荻ノ上風モ漸々身ニ入ミ萩ノ下露
モ彌滋ク、恨ル虫ノ聲々稻葉打戰キ、木葉カツ散氣色、物思ザラヌ
ダニ零行秋ノ旅ノ空ハ悲シカルベキ、増テ平家ノ人々ノ心ノ中推量
ラレテ哀ナリ(岩波大系本二九二頁參照)。

これは前後は百二十句本と同一であるが、これは覺一本に近い本文である。この様な一部分の本文現象は覺一本出現の過程を示すものでは

なく、覺一本の如き一方流平曲の影響を百二十句本がうけてこの様に變化したと認めるのが至當ではあるまいか。

卷十一は缺。卷十二も、百二十句本の同類本である。殆ど差異がなく同文であるが二箇所に大きな相違がある。建禮門院大原寂光院御隠居吏に、

長時不斷ノ御念佛怠ラズ月日ヲ送セ玉ヒケリ、清涼殿ニ花ヲ結シ朝來テ……。

とあつて、百二十句本にある、

天ししやうれいじやうとうしやうかく、一もんばうこんとんしやうばたいといのり給ふ中にも、せんてい二みどの、おもかげ、いかならんよにかわすれたてまつるべきとおぼしをくらせ給ひけり、せりやうでんのはなを……。

の語を脱したものである。これは單なる誤脱であらう。六代御前吏、千本松原より六代の上落した所は、

正月五日ノ夜ニ入テ都へ上リツキ、二條猪熊ノ岩上ト申所ニ文學ノ坊アリ、ソコニ入奉ル、其中ニ大覺寺ヘヲワノ見玉ヘバ、立テ納人モナシ、コハイカニト思ノ餘リニ水ノ底ニモ入り玉ヒタルヤラン、サラバ有シ松原ニテ兎ニモ角ニモ成ベキ物ヲトゾ泣レケル、若君ノ飼玉ヒケルエノコノ築地ノ崩ヨリ走出尾ヲ振テ向ヒケレ、己ハ有ケルカ、人ハ焉チヘゾト問レケルニゾ責ノ吏ニテ有ケル、夜深ケレバ問ベキ者モナシ、サレドモ親ノ者ノ申ケルハ、年内ヨリ長谷ニ籠セ玉フト申セバ、其時安堵メ、齊藤五齊藤六門ヲ開テ入レ奉レバ、ゲニモ近ク人ノ栖タル景モナシ、夜ヲ待明シ聖ト共ニ高雄へ上リ玉フ、

齊藤五齊藤六長谷へ参り、此由申セバ更ニ幻トモ覺玉ワズ、大慈大悲ノ御誓有罪ヲモ無罪ヲモ助ケ玉フ吏ナレバ、カ、ル例多カリキ、女房達急下向ノ若君ヲ喚下シ奉ラセ見奉テモ只夢ノ心地ゾセラレケル、暫ニテ勞バヤトハ宣ドモ、世ノ聞ヘモ怖シトテ、急キ高雄へ送奉ル、聖斜ナラズ慈ニテ二人ノ侍トモニ哀玉ヒケリ、大覺寺ノ幽ナル樓ヲモ常ハ訪奉ル、其後鎌倉殿文學ノ許へ……。

とある。この文は百二十句本と全く異なるのである。これは屋代本に極めて近い文である。百二十句本は、

正月五日の夜にいりて、みやこへのぼりつき、二でうめのくまのいはがみと申所に、もんがくのさとばうあり、そこにいれたてまつり、いきをぞつかせける、夜中に大かくじへおはして見給へば、もんをたて、人なかりければ、をとませず、つみちのくづれよりわかぎみのかひ給ひたるゑのこがはしりいでて、ををふりてむかひけるに、は、うへはいづくにましますぞと、とひ給ひけるこそせめての事なれ、さいとう五、つみちをこえてかどをあげ、いれたてまつるに、ちかふ人のすみたとこも見えざりけり、さればなにとなり給ひたる事ともぞや、いかにしてかひなきいのちをいきたるぞやと、たふれふしなかれけり、いのちをつがんとおもふも、此人々にいま一ど見もし見えもしたてまつらんとおもふがためなりとて、夜もすがらなげきかなしみ給ふぞまことにことほりとおぼえてあはれる、あけてのちきんりの人にとひ給へば、としのうちは大ぶつまでときこえさせ給ひしが、正月のほどはちやうらくじに御こもりとこそうけ給り候へと申ければ、さいとう五いそぎかしこにたづねく

だりて、はゝ上にあひまいらせて、此よし申ければ、はゝうへ、こはさればゆめかやゝとよろこばれけり、いそぎ大かくじにかへり、わかぎみを見まいらせさせ給ひて、うれしきにもさきだつものはなみだなり、はやゝしゆつけし給へとの給へ共、ひじりおしみたてまつりて、しゆつけはせさせたてまつらず、たかをにむかへたてまつりてをきまいらせらる、はゝうへのかすかなる御すまゐをも見つぎ給ひけるとぞきこえし、そのゝちかまくらどのもんがくのもとへ……。

とある。これは百二十句本より屋代本へと變移する跡を示すものではなからうか。次は小原御幸衷に、

諸經ノ要文ドモ色紙ニ書テ所タニ置レタリ、昔シ大江ノ貞元法師：十方ノ諸佛ヲ請ジ奉リケンモカクヤトゾ覺ヘタル、一間ナル障子ヲ開テ御覽ズレバ、竹ノ御棚、麻ノ御衣紙ノ衾、昔ノ蘭麝ノ匂ニ引替タル香ノ烟ゾ心細クナル、去程ニ後ノ山ノ小道ヨリ……。

とある。百二十句本に比して簡略である。これも又屋代本と同文である。「イザサラバ泪クラベン」の歌の次は、

其後ハ法皇モ常ニ御訪ドモ有ケルトカヤとあるが、百二十句本には、

とく大じのさ大じんさねさだ御あんじつのはしらにかきつけけるとかや、

いにしへは月にたとへしきみなれどそのひかりなきみ山べのさととある。本書はこれを脱したものである。

これも屋代本と同様である。

以上によつて、この卷十二は殆ど百二十句本と同文であるにもかゝらず、この二箇所のみが屋代本と同文であることは、百二十句本に屋代本が影響したとも考へてよいが、(百二十句本の成立後に、屋代本の如き平曲が附加したと考へるべきであつて、)屋代本に百二十句本が影響したとは考へられないであらう。後者とすれば、屋代本の大部分が改訂せられなければならない、この僅少の部分のみが残存するといふ説明も不自然であるからである。

以上各卷の特質を吟味して來たのであるが、本書が百二十句本と同類本とは云ひながらも屋代本や覺一本と同一の詞章をふくみ、八坂流古本の發展の跡を窺ひ得る貴重な傳本であることは明白である。

平戸本について

一

山下宏明氏が、古典文庫刊、百二十句本の四の附載の「平家物語百二十句本再考」に紹介せられてゐる斯道本である。卷八欠。十一行片假名交り書寫。卷頭に、平戸藩藏書、樂歲堂圖書の藏書印がある。鍋島本と共に九州に關係が深いので、筆者は平戸本と呼ぶのが適當であらうと思う。慶應大學斯道文庫現藏。書寫年代は室町末といふ。

本書は大略を云へば、卷一と卷三は屋代本、その他は百二十句本と同類本で、前述の鍋島本と同性質を有する卷もあり、使用漢字假名も殆ど一致し、關係が深い、同一ではない。まづその目錄を見るに、

百二十句本と殆ど同様の目録を漢字でかかっている。

卷一、第一句殿上闇討の章では、忠度之母、臚前之夏とあつて、臚前は百二十句本にはない。第三句に義王、第四句に義王出家が来て、百二十句本の第五句第六句と順序が異なる。第四句、義王出家の章では、義王義女土地佛後白川法王之過去帳在夏とあるが、百二十句本には四人とあつて名をあげない。第五句、二代之後の章では、后御入内之夏、后就、圖之障子御歌之夏とあつて、百二十句本には傍點を付した語はない。第八句、成親大將謀叛の章に、師經宇河寺狼藉之夏とある。百二十句本には、もろつねらうぜきとある。

第九句、北政所誓願には、關白殿御逝去之夏とあるが、百二十句本には、御くうぎよの事とある。

卷二、十五句は、平宰相請受で、百二十句本には、こいうくる事とある。十六句、大教訓の章では、褒姒烽火之沙汰とあるが、百二十句本は、ほうくはの事とある。十九句、成親死去の章では、源左衛門信俊使有木別所事とある。百二十句本、事なし。二十句では、嚴島内侍を大内と誤る。しかし殆ど百二十句本と同一といつてよい。

卷三、二十一、傳法灌定の章に、山門學匠與堂衆不快事とある。百二十句本、事なし。二十五句、少將歸洛に、康賴法物集新作之事とある。これも同じ。二十六句に、有王高野奥院籠居之夏とある。二十七句には、辻風之沙汰とある。二十八句、小督、小督局大内被出夏、仲國龜山松原使之夏、局歸參之夏、同出家夏とある。三十句、法皇鳥羽殿御退之夏とある。卷四、三十三句、信蓮小枝持參之夏、三十六句、一如房長僉議とある。百二十句本は、せんぎの事とある。

卷五、四十三句、青侍惡夢事とある。四十八句、富士川の章には、將門追罰之時之勸賞之沙汰とある。百二十句本は事とある。四十九句、福原京而主上御還幸とあるが、御せんかうの誤。五十句、兩使惡口事とある。

卷六、五十三句、朝綱相公之悼之文を葵之女御死去の次にあげてゐる。五十四句、宇佐大宮司飛脚之夏とある。五十六句は、若君子息定夏で終るが、百二十句本は、この次に、じしんばうゑんまのちやうくつしやう、りうしやそうれいの事がある。五十七句、被昇腰輿夏とある。卷七、六十一句、平家北國下向の章、平家行路之狼藉とある。

(國會圖書館本は、この文字なくしてつねまさちくぶ嶋さんけいの事とある)。

六十八句、法皇鞍馬落の章、薩摩守最後とあるが、百二十句本は、さつまのかみしゆんぜいのきやうたいめんの事とあつて本書は誤である。六十九句、若君姫君愛別之夏、五人之兄弟衆愛別之夏とある。

卷八は欠。卷九、百二十句本に同じ。卷十、九十一句、三位中將之文北方稚人之夏とある。卷十一、卷十二は百二十句本と同様である。

以上の目録は百二十句本と同一といつて差支がないが、屋代本と同類本である卷一、卷三にも加へられているのは、目録と本文とが完全に一致するとはいへない點があり、卷一卷三は百二十句本の目録を強ひて加へたと認むべきであらう。本文中には章段なく書き續けてある。

二

卷一、全般的には屋代本、鍋島本とも類するものであるが、此等の

本とも異なる所がある。

殿上闇討の章(巻頭)に、「高望王ノ時」の所に「寛仁二年五月二日」と傍書して補つてゐるのは、鍋島本と關係があらうか。

忠盛ノ郎等本ハ一門爲シ木工助平貞光ガ孫、左近衛尉家貞ト云者有ケリ、薄青狩衣ノ下ニ萌黄威ノ腹巻ヲ着テ紵袋付タル太刀脇ニ挟ンデ殿上ノ小坪ニ畏テゾ候イケル。

とある。これは鍋島本に近い本文である。「紵袋付タル」は屋代本、鍋島本にはない。左近衛尉の傍に、「進ノ三郎季房カ子ナリ」と傍書し、薄青の傍に、「木賊色ノ」と傍書する。「進ノ三郎季房カ子」は一方流本の語であり、「木賊色」は、屋代本、鍋島本の本文である。これを見ても推測される様に、本書は校合によつてか本文の混合された性格がある様である。太宰權師季仲卿の事の次に、花山院忠雅卿の事がある。一方流本百二十句本にはあるが、屋代本、鍋島本にはない。これも後からの増補であらうか。参内上祿の章に、

仁平三年十一月十二日清盛五十八ト申ニ病ニ侵サレ忽チ出家入道シ。

とある。屋代本などは、「仁安三年二月廿一日」とあるのに、本書が仁平とあるのは誤で、一方本の、「十一月十一日」を以て改訂したものであらうか。又この所に、熊野權現の御利生の事が傍書されてゐる。

覺一本よりは百二十句本に近いものである。

此様平家ノ繁昌シケルコトハ熊野權現ノ御利生トソ聞シ、其故ハ清盛公未爲安藝守時、伊勢國ノ阿濃津ヨリ乗船、熊野ヘ詣ラレケルニ、海中ニテ大ナル鱸ノ舟ニ飛入タリケルヲ、先達申ケルハ、昔周武王ノ船ニコソ白魚ハ踊入タル、是只事ニ非ス、マイルヘシト申、

清盛公十戒ヲ持テサシモ精神潔齋ノ道ナレトモ自調味シ我身食家子郎僮トモニモ食セラレタリケル故ニコソ、吉事ノミ打續テ子孫官トモ龍ノ雲ニノホルヨリモナヲスミヤカナリ、九代ノ先蹤ヲ越給コソ目出度ケレ、此テ仁安三年三月十一日……。

とある。次に、

平家一家ノ公卿ノ宣イケルハ、此ノ一門ニ靡ヌ人ハ皆人非人ナルベシトゾ申サレケル、衣文ノカキ様烏帽子ノタメ様ヨリ始テ、何ヌモ六波羅様ト云ケレバ、一天四海ノ人皆是ヲ學ブ、如何ナル賢王賢主ノ御政……。

も屋代本、鍋島本にはなく、一方本、百二十句本に存する語である。

世ニハ又人ナシトゾ見ヘタリケル、昔シ奈良ノ帝ノ御時、神龜五年ニ近衛大將ヲ始テ置レ、大同五年ニ中衛ト改ラレシヨリ以來、兄弟左右ニ相雙ブコト僅ニ三四ケ度也

とあるのは、屋代本、鍋島本は異文である。義王の章は、鍋島本と殆ど同文である。著しい差は、鍋島本にある、

露ノミノ別シ秋ニ消ハテデ又言ノ葉に懸ルツラサヨ

の歌がない。その一節を示してみよう。

何レカ秋ニ逢ワデハツベキト書置玉ヒシ筆ノ跡、眞思ヒ知ラレテ侍ヒシゾヤ、又召サレマイラセテ、今様歌ヒ玉ヒシニモ、思シラレテコソ侍シカ、其後行末ヲ焉トモ知ザリシニ、彼様ニサマヲ替テ一所ニト承リテ後ハ、餘リニ羨シクテ、常ニ暇ヲ申シ、カドモ、入道殿更ニ御用マシマサズ、一々物ヲ案ズルニ、娑婆ノ榮花ハ夢中ノ夢、樂ミ榮テ何カセン、人身ハ受ガタシ、佛教ニハ逢ガタシ、年ノ

若キヲ憑ムベカラズ……。

とある。最後も、

入道相國佛ヲ失ヒ玉ヒテ諸國七道ニ手ヲ分ケテ求ラレケレドモ無カリケリ、其後遙ニ程經テ聞出サレタリケレドモサヤウニ世ヲ厭ヒ爲ン者ヲバ中々トカウ云ニ及ハズトテ、御尋モ無リケルトゾ聞ヘシ。

の語がある。屋代本鍋島本にある所である。二代後の章には、則天武后の事があつて、屋代本、鍋島本と殆ど同文であるが、

高宗ノ近臣屬從群公横ニ取奉ルガ如ニメ、

とあつて、屬從群公は他本にない。額打論には、

同七月廿七日上皇ツイニ崩御ナリヌ、御年ワヅカニ二十三、開カヌ

花ノ散ガ如シ、玉ノ簾、錦ノ帳ノ裡ニ御涙ニ咽バセヲワシマス、御

位ヲ退セ玉ヒテ三十餘日ゾマシメケル、臙而其夜香隆寺ノ良蓮臺

野ノ奥船岡山ニ收メ奉ル、大宮今度モサマデノ御妻愛イモワタラセ

玉ワズ。

とある。傍線を附した所は、屋代本、鍋島本になく、百二十句本、覺一本にはある。又八坂流諸本にある澄憲の歌がなく、覺一本と類する所もある。清水寺炎上の條は、

大衆歸リ上テ後、清水寺ノ大門ニ落書アリ、觀音ノ火坑變成池ハイカン札ヲ書テ立タリケレバ、次ノ日又歷劫不思議是也ト返札ヲゾ立タリケル、

其後一院モ臙而還御ナリヌ、重盛卿バカリゾ御送ニハマイラレケル、父ノ大納言ハト、マリ玉フ、猶用心ノ故カトゾ覺ヘタル、一院還御ノ後、父ノ卿重盛ニ宣ヒケルハ、懸テモ思食ヨルコトナレバコ

ソ、カヤウニハ聞ツラメ……。

とある。落書の事は、屋代本、鍋島本にはない。覺一本、百二十句本にはある。殿下乗合の章にも、時忠について、

内外ニ付タル執權ノ臣トゾ見ヘシ、玄宗皇帝ニ楊貴妃ガ幸セシニ、楊克忠ガ榮タリシガ如シ、太政入道一向天下ノ大小吏ヲ仰含ラレケレバ、人ノ敬ヒ代ノ綾羅双ナシ、叙位除目モ偏ニ此卿ノ儘也。

とあるが傍線を付した所は、屋代本、鍋島本にはない語である。一方本の影響であらうか。成親謀叛の章にも、

朝覲ノ爲ニ法住寺殿ヘ御幸成ル、御初冠ノ粧、法皇モ女院モイカニ勞タフヤ思召ケン、大政入道ノ第二ノ御ムスメ女御ニ參リ玉ヒケリ、法皇御猶子ノ義也。

とある。これも屋代本、鍋島本になく、覺一本、百二十句本にある語である。北政所誓願の章は、屋代本、鍋島本等は簡略であるのに、本書は詳細である。本書の本文は覺一本に近い本文である。これは明らかに一方流本によつて補訂したと認むべきであらうか。御輿振の章では、

此ノ賴政ハ六孫王ヨリ以來源氏嫡々ノ正統弓矢ヲ取テ不覺ナシ、剩ヘ歌道ノ達者、カ、ル艶男ニイカ、時ニ臨ンデ情ナク恥辱ヲバ與フベキ。

とある。屋代本、鍋島本に類するが、此處にも傍書があつて、「深山木ノソノ梢トハ……」の歌があげられてゐる。

以上を以て推測するに、全般的には屋代本、鍋島本の類本であるが、一方流本によつて補訂せられた混合本文を有するものと認むべき

で、もしその反對とすれば、この本文を簡略して屋代本や鍋島本が成立しなければならず、極めて困難な本文成立となるが、屋代本鍋島本を基として一方本を参照すれば容易にこの様な本文は成立するのである。

卷二、卷頭より多田藏人還忠の章の、「行繩コソ申入ベキ亥候テ参リテ候ト申入タリケレバ、アレ何亥ジキケトテ」までは、屋代本の同類本で、以下は百二十句本の本文に殆ど一致するものである。例へば、次に、

主馬判官盛國ヲ出ダサレタリ、幸繩全ク人爲テハ叶マジキニコソト申ス間、入道中門ノ廊ニ出合對面アリ、此夜イハ遙ニ深ヌランニ、何亥ゾ、幸繩、院中ノ人々兵具ヲ整ヘ軍兵ヲ集ラル、ハシロシ召レテ候フカ、入道、不知ソレハ法皇ノ山門ノ衆徒セメラルベシトコソキケトテ、亥モナゲニ宣ヒケレハ、幸繩近フ居寄ツテ、左ハ候ハズ、御一家亡シ奉ランズル結構トコソ承候ヘト申セバ……。

とある。傍線を附した所には誤脱がある。百二十句本に、たゞいまなに事にまいりたるぞとの給へば、さん候、ひるは人めしげふ候ほどに、夜にまぎれてまいり候、しんだなごんなりちかのきやう、そのほかみん中の人々、此ほどひやう具をとゝのへ、ぐんびやうをあつめられし事きこしめされ候や、にうだう……。

とあるのがよい。其の他僅に差とすべきは二三箇所、鬼海嶋の章に、一日片時モ人ノ命有ベシトモ見ヘザリケリ、サレドモ丹波少將ノ舅平宰相ノ所領……。

とある所は、百二十句本に、
一日へんじも人のいのちあるべしとも見えざりけり、いわうといふ

ものみちみてり、かるがゆへにいわうがしまとぞゆける、されども……。

とある。同章に、

其時二人ノ人々幻ナリケリト奇異ノ思ヲナス、此ノ西ノ御前ト申スハ、本地千手觀音ニテヲワシマス。

とあるが、百二十句本は、

そのとき二人の人々うつなりけりときめのおもひをなす、此ごんげんのほんぢ、千じゆくはんをんにておはします。

とあり、「此ノ西ノ御前ト申スハ」は覺一本の（一方流本）影響であらう。祝詞の本文は覺一本に同じく、百二十句本にある、

しかればすなわちなりつね、しやうしう、ゑんたうはいるのくるしみをしのご、きやうじやうくはらくのこきやうにつけせしめ給へ、まさになむまうじうをあらため、むみのしんりをきよむべし。

の語がない。屋代本、鍋島本にはある。最後は、徳大寺殿嚴島参詣の章で、百二十句本と同じである。唯最後に、

サルホドニ歳暮テ治承モ四年ニ成ニケリ。

とある語は百二十句本にはない。これによつて見るに、この卷二によつて、屋代本と百二十句本とは殆ど同時存在の本文であることが認められよう。又事實この卷においては、全般に兩本の差は極めて少いで、百二十句本が屋代本へと變移したものであるといつても差支がない。反對に、屋代本が百二十句本になつたとすれば、全般的に本文を改變しなければならぬのでやゝ不自然の感を免れない。そして百二十句本が全般的に屋代本より覺一本に近い本文である關係上よりも、屋

代本を百二十句本にするには覺一本の如き本文が必要であつて、覺一本によつてもし改訂すれば容易に百二十句本に接近することが出来るからである。

卷三、屋代本と殆ど同文である。例へば、御産卷の章を示せば、

露ノ命ヲ慣ツ、其瀬ニ身ヲモ投ザリシ心ノ程コソ憂ケレ、少將ハ鬼海嶋ヲ出テ浪風ヲ凌ギ、姑平宰相ノ所領肥前國杵ノ庄ニゾ着ケル、浴ナンドノ身ヲ勞リ、杵ニテ年ヲバ暮サレケリ。

同十二月十二日寅尅ヨリ都ニハ中宮御産ノ氣マシマストテ京中六波羅驛アヘリ、御産所ハ六波羅ニテ有ケレバ、法皇モ御幸成、八幡平野大原ナンドニ行詣ナルベキヨシ御願アリ、暹賢法印コレヲ啓白ス、神社ハ八幡賀茂ヲハジメ奉リ……(中略)、

ユ、シカリシ見物ナリ、先例モ御産ノ時ニ臨ンデ大赦行レシコトアリ、大治二年九月十一日待賢門院ノ御産ノ時、行レケル其例トテ今度大赦行ハル、小松殿イソギ車ニ乗り嫡子權亮少將以下ノ君達、同車ニ乗せ奉リテゾマイラレケル……。

とあつて、殆ど屋代本と同文である。大塔建立以下でいへば、鍋島本と漢字、假名の文字づらまでよく一致するので鍋島本と關係の深い傳本である。何れが先出であるかは、容易に推斷は出来ないが、恐らく鍋島本が覺一本を卷頭以下に合せ補訂してゐる點より、本書を先出と認むべきあらう。

卷三に小督の章のある事も又屋代本と同一である。關白流罪の章、行隆出仕の條の前に、

此人々ハ三官トモニ留ラル、抑大政入道イカナル心ニテカヤウノ惡

行ヲバシ玉フゾト云ニ、人申ケルハ○當時關白ニ成リ玉ヘル二位中將殿ト前ノ殿ノ御子三位中將ト中納言御相論ノ故トモ申ス。

とあつて、○の所に、

前關白松殿ノ侍ニ江大夫判官遠業ト云モノアリ、是モ平家ニ快ヨカラザリケレバ、六波ヲヨリ已ニ寄手擲捕ラルベキカバ、子息江左衛門尉家業打具ノ、何地トモ無落行ケルガ稻荷山ニ打上リ馬ヨリ下テ、親子云合ケルハ、東國ノ方ヘ落下、伊豆國ノ流人、前兵衛佐頼朝ヲ頼マバヤト思ヘドモ、其モ當時勅勘ノ人ニテ身一ダニモ難叶在ス也、日本ニ平家ノ庄園ナラヌ處ヤアル、年比住狎タル處ヲ人ニ見センモ恥ガマシカルベシ、只是ヨリ歸テ六波羅ヨリ召ノ使アラバ腹搔切テ死センニハシカジ、瓦坂ノ宿所ヘ乗テ返ス、如案ノ六波羅ヨリ源大夫判官季貞、接津ノ判官盛澄三百餘騎ニテ押寄、時ヲ動ト造ル、江大夫判官縁ニ立出テ、是御覽セヨ各六波羅ニテハ此様申サセ玉ヘトテ館ニ火ヲカケ父子共ニ腹カキ切、炎ノ中ニテ焼死ニシ、加様二人ノ上下多ク亡ビ損ズルコトヲ如何ニト云ニ。

と補つてゐる。覺一本に近い本文を以て補つたものである。

卷四は、卷頭より信連合戰の章の初めまでは極めて特異な本文である。その大要を示すと、

治承四年正月一日鳥羽殿ニハ、入道相國モ許レズ、法皇モ恐シサセマシノケレバ、參入スル人モナシ、故少納言入道ノ子息、藤原中納言成憲、左京大夫脩憲、是レ二人バカリゾ許レテ參ラレケル、同廿三日春宮御袴着并ニ御魚味キコシメス、同十九日春宮踐祚アツ

テ、カヤウノ夏ドモ有シカ共、法皇ハ只鳥羽殿ニテ御耳ノ外ニゾ聞召レケル、先帝與ナル御恙モ渡ラセ玉ハヌヲ、押シ下シマイラセラル、是モ太政入道万夏思フ儘ナルガ致ス所也、主上ハ今年三歳ニナラセヨワシマス、アワレイツシカナル位讓カナト、時ノ人申合レケレバ……(中略、百二十句本と同文)

入道ノ心ヲ和ゲ玉ヘトノ御祈念ナリトゾ覺ヘタル、三月十三日既ニ嚴島ノ御幸遂サセヨワシマス、十八日ノ暮方ニ、上皇前右大將宗盛ヲ召メ、明日通りノヤウニ鳥羽殿ヘ參テ、法皇ニチト見參申サバヤト思召スハイカニ、入道ニ觸レズノハ惡カリナンヤト仰ケレバ、サラバ其ヤウヲ今夜鳥羽殿ヘ奏セヨカシトゾ仰ケル、右大將鳥羽殿ヘ參テ、此ヤウヲ被奏ケレバ、法皇餘リニ思召ス夏ニテ有間、夢ヤラントゾ仰ケル、十九日未明ニ上皇入道相國ノ西八條ヲ出御ナル、比ハ三月半過ヌルニ……(中略)門ヲ指入玉ヘバ、春既ニ暮ナントス、夏木立ニモナリ、梢ノ花ノ色衰ヘテ、谷ノ鶯コヘ老ンタリ、人希ニノ木暗ク物弧ゲナル御消息御覽ズルニ付テモ御涙ゾ進ミケル、去年六月法住寺殿ヘ……(中略、百二十句本と殆ど同文)

中一日御逗留アリケリ、經會舞樂行ハル、國師藤原有綱、神主佐伯景弘座主尊敎勸賞ニ預ル、神慮モ動キ、入道相國ノ心モハタラキヌラントゾ見ヘシ、同五月五日上皇還御ノ次ニ入道ノ福原ノ別業ヘ入セ玉フ、入道ノ孫越前少將從四位上ニ叙ス、養子丹波守清邦正五位下ニ叙ス、六日寺井ニツカセ玉フ、七日鳥羽殿ヘ入セ玉フ、御迎ノ公卿殿上人鳥羽草津ヘゾマイリ向レケル、其日都ニハ新帝御即位アリ、大極殿ニテ有ベカリケルカ、條院ノ延久ノ佳例ニマカセテ太

政官ノ廳ニテ行ルベシトサダメラル、九條殿ノ申サセ玉ヒケルハ……(略百二十句本に同じ)……

出羽藏人光重、源判官光中……、多田藏人行綱、多田次郎朝實、同三郎高賴、大和ニハ宇野七郎……屋嶋先生重時、其子太郎時清、甲斐國ニハ武田太郎信義、加々見次郎遠光、其子太郎長清、安田三郎義光、一條次郎忠賴、板垣三郎兼信、逸見四郎有義、伊澤五郎信光、大内太郎惟義、信濃國ニハ帶刀先生義堅カ次男、木曾冠者義仲、平賀冠者盛義、其子四郎義信、岡田冠者親義、其子太郎重義、伊豆國ニハ流人前右兵衛佐賴朝、常陸國ニハ爲義ガ三男三郎先生義章トテ信田ノ浮嶋ニ候……九郎冠者義經トテ、是等ハ皆清和天皇ノ御苗裔、六孫王ノ後胤ナリ、昔ハ源平左右ニ爭テ朝敵ヲ靜メ宿望ヲ遂シコトハ、何レ勝劣ナカリシカ共、今雲泥ニ交リヲ隔テ、主從ノ禮ニモ猶劣レリ、國ニハ國司ニ隨ヒ、庄ニハ領家ニ仕ハレ、公夏ニ驅リタテラレテ夜晝ヤスキ心モ候ハズ、イカ計カ心憂ク候ラン、誠ニ令旨ヲ下サセ玉フナラバ、是等ハ……(中略)

義仲ハ甥ナレバ取ラセントテ山道ヘコソ趣キケレ、法皇ハ成親俊寛ガヤウニ遠キ國遙ノ嶋ヘモ流シヤセンズラント思召シシカドモ、城南離宮ニ遷サレテ、此年ハ二年ニ成セ玉フ、五月十二日成尅バカリニ鳥羽殿ニハ颯ヲビタシク驩テ、御前ヲ走り回ル、法皇御謠ヲ遊バシ、近江守仲兼ノ其比藏人人ニテ候ヲハレケルヲ召シ、汝等此ウラカタヲ持テ泰親カ許ヘ行向テ、急ト勸ヘ申サセヨト仰ラレケレバ、仲兼是ヲ玉ハツテ、泰親カ許ヘ行向テ、勅定ノ趣ヲ申セバ、泰親勸テヤガテ勸狀ヲコソ進セケレ、仲兼是ヲ請取、鳥羽殿ヘ販リ參リ、

門ヨリマイラントスバレ、守護ノ武士危テ入ズ、案内ハ知タリ、築地ヲコエテ、泰親ノ勘狀ヲ持テマイル、法皇是ヲ御覽スレバ、三日ノ内ニ御悅、ヤガテ并ニ御歎トゾ申ケル、今ハ是ホドノ御身ニ成テ、御悅ハ又何ノ御歎カ有ベキトテ、御涙ニ咽セ玉フ、同十三日、前右大將宗盛強ニ申レケレバ、大政入道思ヒ直テ、法皇ヲ鳥羽殿ヨリ八條烏丸美福門院ノ御所へ御幸ナシ奉ラル、法皇安部泰親カ三日ノ御悅トト申タリシハ是ヲ申ケルニコソトゾ思召レケル

去程ニ高倉院ノ御謀叛ノ由披露仕ル、法皇是ヲ聞召シ由ナキ都出テカク憂キコトヲ聞召ヨトテ、又御涙ニ咽セヨワシマス、大政入道福原ノ別業ニヨワシケルニ、前右大將宗盛脚力ヲ立テ申シタリケレバ、大政入道大ニ嘆テ、別ノ子細アルマジ、宮ヲ急ギ奉擲取、土佐ノ畑ヘ流マイラスベシトゾ宣ケル、上卿ハ三條大納言實房、職事ハ頭左中辨光雅トゾ聞ヘシ、出羽判官源大夫判官ニ此由ヲ仰付ラル、此ノ源大夫判官ト申ハ、三位入道ノ養子也、然リ此ノ人數ニ入ラル、コトハイカント云ニ、三位入道宮ヲ進メマイルセタリト云コトヲ、平家未知ケルニ依テナリ、三位入道是ヲ聞急ギ宮ヘ消息ヲコソ進セケル、宮ハ五月十五夜ノ雲間ノ月ヲ詠サセ玉フ所ニ……。

とある。この本文に近いものは平松家本と大山寺本である。傍線を付した所は平松家本の本文と一致する所で、百二十句本、覺一本とは甚しい差異がある。注目すべき點は覺一本にある記事が多く存しない事である。これは恐らく省略、簡略化せられたのであらう。その逆は成立しない。詳細な覺一本より簡略な流布本への關係と同じ性質といふべきであらう。本書は平松家本よりもつと簡略化してゐると認められ

よう。

信連合戦の章以後は百二十句本と同類で、しかも鍋島本と殆ど同文であるが若干差異がある。例へば、競の章に、

其馬六波羅ヘツカワセト有ケレバ、伊豆守馬ヲ惜ムニテハ候ハズ、權威ニ付テ責ラル、ト思ヘバ、本意ナウ候程ニコソ、遣シ候ハネトテ、ヤガテ木下ヲ六波羅ヘ遣サル、右大將此馬ヲ引マワサセ〳〵見ルベキ程ミテ、生憎ヤ、サシモニ是ヲバ主ガ惜タル馬ゾカシ……。

とあつて、「戀しくば……」の歌なく、その他では殆ど同文である。又、牒狀の章に、

平家近江米一萬斛、北國ノ織延ノ絹三千疋山ノ往來ニ寄セラル、座主登山シテ然ルベカラザルノ由誘ヘ宣バ、宮ノ御方ヘハ不定ノ由ヲゾ申ケル、南都ノ牒狀云。

とあつて、落首なく、鶴の章に、二條院の御時の鶴の事がなく、

頼政ハ優遊シウコソ申シタレドモ、遠國ハ知ラズ、近國ノ源氏ダニモ馳マイルラズ、山門サヘ語合レザリシ上ハ、トカウ申ニ及ハズ、日來ハ山門ノ大衆コソ濫ガワシキコトモ申セシニ、今度ハ隱便ヲ存ノ音モセズ、南都三井寺ハ更ヲ亂リ、或ハ宮ヲ扶持シ奉リ、或ハ御迎ニマイル……。

とある。依つて、信連合戦以後について言へば本書は鍋島本よりも後出の形と言ふべきである。卷頭卷末に太平記卷十七の牒狀を書き加へてゐるが直接關係がないので省略する。

卷五は、百二十句本と殆ど同文といふべきである。その差異は、都遷の章に、鍋島本にない都遷の先蹤の記事が存すること、平家東國下

向の章に、

鈴バカリ賜テ皮ノ袋ニ入テ雜色ガ頸ニ懸サセテゾ下ラレケル、奉テ

戰場ヘ向フ大將軍ハ三ノ存知アリ、先ヅ參内ノ勅命ヲ蒙ル時家ヲワ

スル、家ヲ出ル時妻子ヲ忘ル、戰場ニテ敵ニ合フトキ身ヲ忘ル、是

ヲ三ノ存知トス、サレバ權亮少將モカヤウノヲモサコソ存知セラ

レケメ、各九重ノ都ヲ立テ、千里ノ東海ニ趣ク、平カニ飯リ上ンコ

トモ難ケレバ、實ニアヤウキアリサマ共ニテ、或ハ野原ノ露ニ旅寢

ヲシ、或ハ高根ノ雲ニ宿ヲ借り、山ヲ重ネ水ヲ阻テ、日數フレバ同

十月十三日ニハ、平家駿河國清見關ニゾ着玉フ、都ヲ三萬餘騎ニテ

出シカドモ、路次ノ兵召具メ、七萬餘騎トゾ聞ヘシ、先陣ハ進メド

モ未ダ近江國海津ノ邊ニ拽ヘタリ、中ニモ皇后宮亮經正ハ詩歌管絃

ニ長シ玉ヘル人ナレバ……(以下百二十句本に同じ)

凶徒只今落サンコト疑ナシト悦ビ、亦船ニノリ竹生嶋ヲ出ラレケ

リ、

同廿二日新院嚴嶋ニ御幸ナル、御共ニハ前右大將宗盛……(以下鍋島

本と同文)……其故ニヤ一兩月ノ程ハ靜ニメ、法皇モ鳥羽殿ヨリ還御

ナンド有シガ……治承四年九月廿九日

太上天皇御諱

十月六日舊都ヘ還幸、今度ハ福原ノ新都ノ御幸ナレバ數斗ノ御煩ナ

カリケリ、

先陣ハ已ニ蒲原富士川ニ進ム、後陣ハ未ダ手越宇津屋ニ支ヘタリ、

大將小松權亮少將侍大將上總守忠清ヲ召ノ……。

とあるのは、鍋島本と記述の順も異り、百二十句本とも異り、本書の

特異な本文である。傍線を附した所は、他本にはない所である。他に、一面錯簡があつて、

宣旨ヲ奉テ戰場ヘ向フ大將軍ハ三ノ存知アルベシ……七萬餘騎トゾ

聞ヘシ

先陣ハ已ニ蒲原富士川ニ進ム、後陣ハ未手越宇津屋ニ支ヘタリ、大

將小松權亮少將侍大將上總守忠清ヲ召ノ……福原ヲ立セ、

とある。これは恐らく、經正竹生嶋詣、新院嚴嶋詣の二章を略した形

として誤寫したもので、後に前述の如く改めたものであらうか。

富士川の章も鍋島本に殆ど同文であるが、鍋島本の誤脱の所は、本

書は改訂せられて、

遊君遊女ドモ或ハ頭蹴破レ、腰蹈折レテ、叫喚者多カリケリ、明

ル卯尅ニ源氏ノ大勢推寄テ時ヲツクレドモ平家ノ方ニハ音モセズ、

人ヲ入テ見セケレバ、皆落テ候フト申ス、或ハ鎧取テ參タル者モ有

、或ハ大幕取テ參タル者モアリ、

とある。百二十句本とも異なる本文である。覺一本とも異なる本文であ

る。同じく、

小松權亮少將維盛、福原ノ新都ヘ飯リ上ラル、入道相國大ニ嘖テ、

大將軍小松權亮少將ヲハ鬼海嶋ヘ流スベシ

も同様である。

卷六も鍋島本と殆ど同文である。卷頭は、

治承五年正月一日内裡ニハ東國ノ兵革南都ノ火災ニ依テ朝拜ヲ止メ

ラレ、主上出御モナシ、物ノ音モ吹鳴サズ、舞樂モ奏セズ、吉野ノ

國栖モ參ラズ、藤氏ノ公卿一人モ參ラレズ、氏寺燒失ニ依テ也、二

日殿上ノ宴醉モナク、男女打咽ビテ禁中忌々シクゾ見ヘケル、佛法
皇法トモニ盡ヌルコトゾ淺マシキ、一院仰成ケルハ、五十善ノ餘薫
ニ依テ萬乗ノ寶位ヲ保ツ、嗣代ノ帝王ヲ思フニ、如何ナレバ萬機ノ
世務ヲ停メラレテ歲月ヲ送ルラントゾ御嘆アル、
とある。勿論文字面からは同一でない。傍線を附した所は百二十句本
と異なる所である。高倉院崩御の章では、澄憲法印の歌がある。鍋島本
はなし。

鑿而今夜東山ノ麓西閑寺ヘ遷シ奉リタベノ烟ニタトヘ、春ノ霞ト昇
セ玉フ、朝憲法印ハ御葬送ニ參リ逢ントテ、急ギ山ヨリ下ラレケル
ガ、早ヤ空シキ烟ト成セ玉フヲ見奉テ、常ニ見シ君ガ御幸ヲ今日問
ヘバ飯ヌ旅ト聞ゾ悲キ

御歳廿一、内ニハ十戒ヲタモチ……。

とある。傍線を付した所は覺一本と異なる所である。紅葉卷では、

鍋島本に、

申ケル所ニ(百二十句本同)

本書では、

思ハシキコトナウ案ジツマケテ候ケル處ニ

鍋島本に、

男ノ二三人詣テ(おとこ三人まうできて)

本書では、

男ノ三四人詣來テ

とある。葵女御の章の最後は、鍋島本に、

殿ニ入ラル、コトヲヤメラル、ニハ少シモ違ワセ玉ワズ、其比中宮

平家物語、鍋島本と平戸本

ノ御方ニ……。

とあるが、本書は、

殿ニ入レラル、コトヲヤメラル、ニハ少シモタガワセ玉ハヌ、御心
態也、主上戀慕ノ御思ヒニ沈マセヨワシマス、法皇御歎ノミ打ツ、
キ御悲ゾ隙ナカリケル……。

とあつて、小督の事がない。本書は卷三に收める。本文は鍋島本と同
じく又屋代本とも同一である。百二十句本とは異なる所がある。又葵女
御の章、鍋島本は、

イツシカカクアル列不可然ゾ人々ハサ、ヤキ合ケル(百二十句本同文
とあるに、本書は、

イツシカツネメカシトゾ人々ハサ、ヤキケル。

とある。入道死去の章、鍋島本に、

身ハ片時ノ烟トナリ都ノ空ニ立上リ(百二十句本は、へんじのけふりと
なり)

本書は、

身ハ一時ニ烟トナリ都ノ空ニ立チ上リ

とある。祇園女御の章の次に、鍋島本、百二十句本にある慈心坊、宗
論の章がなくて、

大小ノ天下ノ大叟ノ都遷シナンドヲモ輒ウ思ヒ立レケルニコソ理也

トゾ人申シケル、同閏二月廿日五條大納言國綱卿モ失セ玉ヒヌ……。

とある。以上によつて本書の方が鍋島本より後出と認むべきであら
う。

卷七、全般的には鍋島本と極めて近い本文を有するが、すべて鍋島本

と一致するものではなく、百二十句本と一致する所も少くない。次に注目すべき所を示せば、平家一門願書の章、平家の連署がなく、

壽永二年七月日前内大臣從一位平朝臣宗盛謹上座主僧正御房トゾ書タル、山王大師憐ヲ垂玉へ、三千ノ大衆力ヲ合せヨトナリ、サレドモ年來日比ノ振舞神慮ヲ背キ違人ノ望ケレバ祈レドモ叶ハズ、語ヘドモ靡カズ、大衆是ヲ見テ……。

とあるが、鍋島本には、連署があつて、

從一位内大臣平朝臣宗盛 敬白

トゾ被書タル、貫首是ヲ慇給テ聽テモ不被披露十禪師ノ御殿ニ籠テ三日加持ノ後被披露、始ハ有ルトモ見ヘザリツル一首ノ歌願書ノ表卷ニ出來タリ、

平ラカニ花咲宿モ年經レバ西ヘ傾ク月ト社ナレ

大衆是ヲ見テ……。

とある。百二十句本は兩本の記事をすべて有する。恐らく鍋島本や本書は誤脱であらう。覺一本は百二十句本と内容は同一であるが鍋島本や本書の本文は百二十句本に全く一致し、覺一本とは異なるからである。忠度都落の次に、經正都落、青山沙汰がない。鍋島本と同一である。百二十句本には存する。平家一門都落の章に、平時忠が男山を拝して、

我等ヲ今一度都へ飯シ入レサセ玉ヘト泣々申レケルコソ悲ケレ、肥後守貞能ハ河尻ニ源氏共ガ向フタリト聞テ……。

とある。鍋島本は、

我等ヲ今一度都へ飯シ入レサセ玉ヘト泣々申レケルコソ悲シケレ、

各々後ヲ顧ミ玉ヘバ、霞メル空ノ心地ノ烟耳心細ゾ立昇ル、平中納言教盛、

ハカナシヤ主ハ雲井ニ別レバ宿ハ烟トタチノボルカナ修理大夫經盛、

古サトヲ燒野原ト歸見テ末モ烟ノ濤路ヲゾユク實ニ古郷ヲバ一片ノ烟塵ニ隔ツ、前途萬里ノ雲路ニ被越ケル人々ノ心ノ中左社ハマシマシケメト推量レテ哀也。

とある。本書はこの記事は後出で、百二十句本と同一である。(鍋島本卷七參照)。次の如くである。屋代本も同文である。

年比ノ重恩爭カ忘ルベキナレハ、若キモ老タルモ、只後ヲ而已顧テ、更ニ前ヘエハ進モ遣ザリケリ、各後ヲ顧テ、都ノ方ハ霞メル霄ノ心地ノ、煙ノミ心細クゾ立上ル、其中ニ修理大夫經盛、都ヲ顧玉ヒテ、泣々此ゾ宣ケル、

フル里ヲヤケ野ノ原ト顧テ末モ烟ノ浪路ヲゾ行ク

薩摩守忠度、

愚シヤヌシハ雲井ヲ別ルレバ跡ハ煙リト立上ルカナ

誠ニ古郷ヲバ一片ノ煙塵ニ隔テ、前途萬里ノ雲路ニ趣キ玉イケン人々ノ心ノ中コソ悲シケレ、習ハヌ磯邊ノ浪枕……。

鍋島本と本書を以て百二十句本の誤脱を正す點もかなりあるが、これは覺一本が存在するとすれば鍋島本や本書の存在はさほど重要でない。何となれば百二十句本の誤脱は覺一本によつて十分に補へるからである。例へば、但利伽羅落の條に、本書と鍋島本は、

百騎ヲ出せば兩方百騎充楯ノ面ニ進ンダリ

とある。百二十句本は、

百きをいだせば百きをいだし、りやうはうたてのおもてにすゝんだる。

覺一本には、

百騎を出せば百騎を出しあはせ、兩方百騎づゝ陣の面にすゝんだりとある。百二十句本、木曾願書に、

はくろくをぜついきにながしたてまつる、しかのみならず同四年五月に……。

とあるが、鍋島本、本書では、

奉流博陸於西海絕域、衆庶不言、道路以目、加之同四年五月……。

とある。覺一本も鍋島本と同文である。山門返牒の語にも、百二十句本に、

しんめいさだめてふくせん事をずいきし給はん。

とあるが、鍋島本、本書には、

神明定悦教法之再榮、隨喜崇敬之復舊

とある。これも覺一本と同文である。従つて百二十句本の誤脱は覺一本さへ存在すれば、鍋島本、本書の存在は重要でないことが認められるのである。筆者の覺一本先出説を否定すべき所は毫もないのである。

巻八は缺である。

巻九も、鍋島本とよく一致すると言へようが、又異なる所もあり、百二十句本と一致する所もあつて、巻七の場合と相似た性格を有するので、前後關係を簡単に推斷することは出来ない。次に重要な所を示めさう。

宇治川の章では、

信太三郎先生義範三百餘騎ニテ芋洗ヲゾ防ギケル、其比鎌倉殿ニ生數寄摺墨トテ聞ヘタル名馬アリ。

とあり、鍋島本は、「其比」の前に、

自東國範頼義經木曾ヲ討手ニ上ル夏

攻上ル大手ノ大將軍ハ蒲冠者範頼搦手大將軍九郎御曹司義經宗トノ大名三十餘人都合六萬餘騎トゾ聞ヘシ(百二十句本覺一本あり)

とある。又梶原景季の語に、

日來ハ都ヘ上テ木曾殿ニ聞ル今井樋口トカヤニ組ンデ死スルカ、左ナクバ平家ニ組ンデ死ナントコソ思ツレドモ、其モ今ハ詮ナシ、爰ニテ佐々木待請ケ引組ンデ落、サシチガヘ、鎌倉殿ニ損トラセ奉ラズル物ヲト、思切テ待處ニ、佐々木四郎何心ナク歩セ來ル、推並テヤ組ン、向フザマニヤアテ落サンズナンド思ヒ煩フ。サルニテモ一言問テ組ント思ヒ、イカニサ、キ殿御邊ハ生數寄玉ハラレテケリト詞ヲカク、佐々木誠ヤ此ノ人モ所望仕リタル由内々承リツル物ヲト、急ト思出テ、チットモ騒ガズ、打笑テ、ヤトノ賜ヌトヨ、宇治川渡スベキ馬ハモタズ、御秘藏ノ御馬ナレバ申トモヨモ給ジ、何カ苦カルベキ、盜ント思テ伺ツルホドニ、既ニ曉立ントテノ夜、便宜ヨク盜ミスマシテ上ルゾトヨト云ケレバ、梶原此詞ニ腹ガ居テ、不分サラバ景季モ偷ムベカリケル物ヲト、ドツト笑テ退ニケリ。

とある所は百二十句本と甚しく異り、鍋島本と同文と言へよう。鍋島本の條参照。又同章に、

川霧深ク立籠テ馬ノ毛モ定タカナラズ、兵ドモ河ニ打向ヒ、イカバ

セズルトテ拽ヘタリ、畠山庄司次郎進出テ申レケルハ、此ノ河ノ面ヲ見ルニ、馬ノ足ノ及バザラン所、三段ニハヨモ過ジ、近江ノ湖ヨリ出タル河ナレバ、マツトモく水ヒマジ、此河ノ定メハ兼テ鎌倉殿ノ御前ニテサシモ御沙汰候シヌカシ、今始タルコトナルニコソ、治承ノ合戦ノ時足利又太郎ガ渡シケルハ神力佛カ物ガマシ、重忠瀨蹈仕ラシ、武藏ノ殿原續ケヤトテ……。

これも又鍋島本と殆ど同文である。百二十句本、覺一本に比して簡略である。兼平（義仲最後）の章に、

中有ノ旅ノ天、想像コソ哀ナレ、七騎ガ内ニ巴ト云女武者有ケル、其比齡二十三也、大力ヲ強弓ノ精兵、究竟ノ荒馬乗ノ惡所落シ。

とあるのも鍋島本に同じ。一谷合戦の條に、

二位僧都運眞ハ梶井ノ宮ノ御返ヌニハ、旅ノ空思ヤルコソ心苦ケレとあるのも鍋島本と同文である。熊谷平山一二懸の章に、

小次郎ハ澤潟ヲ一摺々タル直垂ニフシナワ目ノ鍔キテ黄瓦毛ナル馬ニゾ乗タリケル、ハタザシハ黄陳ノ直垂ニ小櫻ヲ黄ニカヘシタル鍔キテ西樓ト云白鬚毛ナル馬ニゾ乗タリケル。

とあり、これは鍋島本と異り、百二十句本と同文である。鍋島本の條参照。師盛最後の次に、

但馬守經雅ハ河越小太郎重房カ手ニ懸テ討レ玉ヒヌ、門脇中納言教盛末子藏人大夫業盛ハ……。

とあつて脱文があり、鍋島本と同じく、敦盛最後は、

錦ノ袋ニ入タル笛ヲ引合ニサ、レタリ、是ハ父修理大夫幼少ノ時キ、鳥羽院ヨリ賜ラレシ小枝ト云笛也、熊谷はヨミテ……（中略百二

十句本同文）三佛乗ノ因ト成コソ哀ナレ、サルホド敦盛ノ御形見、奥ナル御船ニ送奉バヤトテ、最後ノ時召レタル御装束以下一モ殘サズ取副テノ牒狀ヲ書、修理大夫ヘ奉ル、其牒ニ云。

とある。これも鍋島本と同文である。卷末も、

通盛女院ヨリ此ノ女房ヲ賜テ取重ンゼラレケリ、良ハ幸ノ花ナレバ淺カラズ契リテ、憂カリシ波ノ上船ノ中マデモ引具ノ、終ニ同ジ道ニ趣カレケルコソ哀ナレ。

とある。傍線を付した所は鍋島本にはない。以上によつてこの巻は鍋島本と殆ど同文といつてよいが、全く一致するかといふと差異もある。従つて本書は直接ではないが鍋島本を補訂したものと推定するのが適當であらう。

卷十、重衡受戒の章に、

上人是ヲ請取テ懷ニ入レ涙ヲ押ヘ出玉フ、八條女院ニ木工充政時ト云侍アリ、有ル暮レ方ニ土肥次郎ガ許ニ來テ申ケルハ、是ハ元召仕レ候シ木工右馬充ト申ス者ニテ候ガ、八條殿ニ兼參ノ身ニテ候ナリ、弓ノ本末ヲモ知リ候ハネバ……（以下は百二十句本と同文）

とある所は百二十句本と異り、鍋島本とも異なる。然し後半、

三位中將ヤガテ文ヲ書テゾ給ケル、政時は玉ハツテ出ケレバ、土肥次郎イカナル御文ニテ候ラウヤラン叶マジキ由ヲ申ス、苦カルマジ、其文トクくミセヨト宣バ、土肥次郎此文ヲ取テ見ニ、眞モ女房ヘノ御文ニテ候ヒケリトテゾ取セケル。政時取テ宿所ヘ歸リ、日ヲ待クラシ、誰ソ彼時ニ内裡ヘ參リ、雲上靜ナル程ニモ成ケレバ、此女房ノヲワシケル局ノ邊ニ行テ、聞ケルホドニ、折節是ニモ三位

中將ノ御夏ヲ宣ヒ出レタル……(中略)ワリナクヲワシケレ、サレ
バ中將南都ヘ渡サレ斬レ玉ヒヌト聞ヘシカバ、様カエ形ノ如ノ佛夏
ヲ營ミ後世ゾ訪ヒ玉ヒケル鎌倉前右衛佐賴朝頻ニ申シケレハ……

とある。傍線を付した所は屋代本にはない。百二十句本、鍋島本には
存する。この内裏女房の文は、殆ど屋代本と同文である。これは極め
て注目すべき本文である。百二十句本と屋代本との如き平曲の同時存
在を認むべき根據であらう。鍋屋本に於いては、覺一本の混入があり、
本書には又屋代本の混入があるのも注目すべき現象である。重衡東下
の章には、鍋島本と同じく、覺一本、百二十句本にある「ひばりのぼ
れるのちのさと」、「まつのかずゑにかぜさえて、いり江にさはぐな
みのおと、さらでもたびは物うきに心をつくすゆふまぐれ」の語がな
く、

旅ノ空土産小屋ノイブセサニイカニ古郷戀シカルラン

三位中將ノ御返事ニ、

古郷モ戀シクモナシ旅ノ天都モ終ノスミカナラネバ

都ヲ出テ、日數フレバ、彌生モ半バ過ナントス、遠山ノ花殘ル雪カ
ト見エテ浦々嶋々モ霞渡レリ、來方行末思ヒツケテ、イカナル宿
業ヤラント悲玉ヘドモ甲斐ゾナキ、葛雞冠木本々ノ葉シゲリテ、心
細ク宇都屋手越ヲ過行バ、北ニ遠ザカリテ雪白キ山アリ……。

これも又屋代本と同文である。賴朝對面の條も、

量リナキ罪業ニテコソト宣バ、三位中將、一門運盡テ都ヲ既ニ落シ
上ハ、骸ヲ山野ニ曝シ江海ニモ沈メベシトコソ存候ヒツレ、是マデ
下ルベシトハ思ヒヨラズ、殷王ハ豈代ニ囚レ、文王ハ牖里ニ捕ハ

平家物語、鍋島本と平戸本

ル、弓矢トル身ノ敵ノ手ニ捕ハレテ滅サル、コト昔ヨリ皆有ルコト
也、重衡一人ニ限ラネバ今更恥ベキニアラネドモ、先世ノ宿業コソ
口惜ウ候ヘ、只芳恩ニハトクノ頸ヲハネラルベク候ト宣テ其後ハ
物ヲモ云玉ハズ、南都ヲ亡サレシ大將也、大衆定テ申旨有ンズラン
トテ、伊豆國ノ住人狩野介宗持ニ預ケラル、其躰冥途ニテ娑婆世界ノ
罪人ヲ七日々々二十王ノ手ニ渡スランモ此クヤト覺ヘテ哀レナリ。

とある。これも屋代本と同文である。これをみるに百二十句本の長文
を脱すればこの文が出現するのである。覺一本も百二十句本と同じく
長文であるが、覺一本の本文はこの八坂流本とはやや異なるので、平曲
としては百二十句本と屋代本が同類の本文である。この場合に屋代本
を増補して百二十句本を成立せしめることは極めて困難で、覺一本に
依らねば出来るものではないが、百二十句本より屋代本の出現は極め
て容易である。

既ニ朝敵トナレル人也、出家有ベカ、ズトゾ宣ケル、三位中將守護
ノ武士ニ向ヒ、サテモ此ノ傾城ハ愛シタル者哉、名ヲバ何ト云ヤラ
ント宣バ、狩野介畏テ申ケルハ、アレハ手越ノ長者ガ娘ニテ候ガ、
心ザマ優ニ候トテ、兵衛佐殿此三四年ハ召仕レサウラウガ、名ヲバ
千手前ト申候、兵衛佐殿三位中將ノカヤウニ宣フ由傳聞玉ヒテ、此
女房ヲ花色ニ仕立セテ三位中將ノ許ニ遣ハサル、或晩方ニ雨降り世
間ウチ靜テ物冷シカリケル折節、件ノ女房琵琶琴ヲ持テ參リタリ。

とある。傍線を付した所は鍋島本にない所である。傍点は差のある所
である。本書の方は百二十句本と殆ど同文である。横笛の章では、百
二十句本と殆ど同文であるが、終の方が異りて、

池ノ水ノ積リテ物ヲ思フナルモ今コソ思シラレケレ、様ヲカエタル由ヲ聞ケレバ、坂テ瀧口入道ニ一首ノ歌ヲゾ送りケル、

剃ルマデハ恨ミシカドモ梓弓眞ノ道ニイルゾウレシキ

瀧口ガ返事ニ、

剃ルトテモ何カ恨ン梓弓引ト、ムベキ心ナラネバ

其ノ思ヒノ積リニヤ、横笛奈良ノ法華寺ニ在ケルガホドナク死シテケリ、瀧口入道此ノコトヲ傳ヘ聞、主ノ聖ニ向テ申シケルハ、是モ世ニ閑ナル處ニテ念佛ノ障礙ハ候ハネドモ、飽カデ別レシ女モハヤハカナクナリス、天性其ノ故ニコソ加様ニ發心ヲノ候ヘ、由シナキ都近キ處ハ、又此ク浮叟モヤ聞カン、暇申テトテ、嵯峨ヲ出テ、高野ヘ登リ清淨心院ニ此四五年行ヒ澄ノ居タリケレバ、父ノ不孝モ免レタリ……。

とある。この文は屋代本に殆ど同文である。然し前後は百二十句本と同文であるによりて百二十句本より、屋代本への推移を示す好例であらうか。鍋島本は百二十句本と同文である。

維盛入水の章に、

維盛法名淨圓廿七ニテ濱宮ノ御前ニテ入水シ畢ヌト書付テ、又船ニ乗リ海ニゾ浮玉ヒケル、比ハ三月廿八日ノコトナレハ、春モ既暮ナントス、海路遙ニ霞ミ渡テ哀ヲ催ス類ナリ。

とあるが、鍋島本は、

維盛法名淨圓廿七歳濱宮ノ御前ニ而入水畢

生レテハ終ニ死ニテウヌノミゾ定无世ノ定アルカナ

ト書付テ又船ニ乗リ海ニゾ浮ヒ玉ヒケル、此ハ三月廿八日ノコトナ

リケレバ、春モ既ニ暮ナントス、海上遙ニ霞ミ渡テ哀ヲ催ス計ナリとある。維盛の歌は百二十句本にもある。又本書に、

泣々取留ケレバ、船底ニ倒伏シ鳴叫ブコト斜ナラズ、聖モ餘リノ悲サニ墨染ノ袖ヲ絞リケル(鍋島本同文)

とあるが、百二十句本と異なることは鍋島本の條で既に示した如くである。池大納言關東下の章に、

神武天皇八十二代ヨリ是始トゾ承ル、ヤガテ其日蒲冠者範頼三河守ニナル、其比改元アツテ元暦ト號ス、漸々秋モ半ニ成ヌレバ、月冷ク萩ノ上風身ニ染、萩ノ下露、露々滋シ、稻葉ウチ戦キ恨ムル虫ノ聲、木葉且ツ散リサラヌダニ深ケ行秋ノ旅ノ天ニハ悲キニ平家ノ人々心ノ中推量ラレテ哀ナリ、昔シハ九重ノ内ニ春ノ花ヲ翫ビ今ハ屋嶋ノ磯ニノ秋月ニ悲メリ、同九月十二日……。

とある。鍋島本は、

神武天皇八十二代ヨリ是始トゾ承ル、聽テ其日蒲冠者範頼三河守ニナル

蒲冠者範頼任三河守九郎義經蒙宣旨

同八月六日蒲冠者範頼三河守ニ成ル、九郎義經左衛門尉成、則使ノ宣旨ヲ蒙テ九郎判官トゾ申ケル、

元暦改元之夏

其比改元有元暦ト號ス左有程ニ萩ノ上風モ漸々身ニ入ミ、萩ノ下露モ彌滋ク、恨ル虫ノ聲々、稻葉打戦ギ木葉カツ散氣色物思ザラヌダニ霄行秋ノ旅ノ空ハ悲シカルベキ、増ノ平家ノ人々ノ心ノ中推量ラレテ哀ナリ、昔ハ九重ノ中ニメ春ノ花ヲ翫ビ今ハ屋嶋ノ磯ニノ、秋

ノ月ニ悲シメリ、都ニ今夜如何ナルラント思ヤル心ヲ消シ涙ヲ流テ
ゾツラネケル、幸盛、

君住メバ爰モ雲井ノ月ナレド尙戀シキハ都ナリ梟

同九月十二日……。

とある。傍線を付した所は本書と異なる所で、鍋島本は百二十句本に近い。本書には誤脱が多い。その他は約百二十句本、鍋島本と差はないといつても差支がない。けれども本書が屋代本と同文を含有する事は前述の如く極めて重要である。

卷十一、この巻も殆ど百二十句本と同文であるが、全く同一ではない。百二十句本の誤脱を補ふ點もかなりある。反對に本書が百二十句本によりて訂正される所もある。扇之的の章に、

正八幡大菩薩、殊ニハ我國ノ神明日光權現、宇都宮大明神、武人、人ハ千金ニモ替ズゴソ御誓願候ナレ、是を射損ズル物ナラバ……。

とあるが、これは屋代本に一致し、百二十句本は、
正八まん大ぼさつ、べつしてはわが國のしんめいにつくはうごんげ
んうつのみや、なすのゆぜん大みやうじん、ねがはくはあのおふぎ
のまつなかいさせてたばせ給へ、これをいそんずるほどならば……。

とある。又同じ章に、
白浪ノ上ヲ浮ヌ沈ヌ洵レケリ、陸海上ノ敵慈^{ミカダ}舷ヲ扣キ心服ヲ^{タビキトヨメキ}敲動搖
ケリ、平家ヨリ餘ノ面白サニ、フシナワ目ノ腹卷ニ白柄ノ長柄持タル武者一人出來テ……。

とあるが、これも屋代本に近く、百二十句本には、
しらなみのうへにうきぬしづみぬゆられければ、おきには平家ふな

ばたをたゝゐてかんじたり、くがには源氏をびらをたゝゐてとよめ
きけり、あまり、おもしろさにかんにたえざるにや、ふねのうちよ
りよはひ五十ばかりのおとこのくろかはおどしのよろひきて、しら
えのなぎなたもちたるむしや一人いできたつて……。

とある。前後の本文が百二十句本と一致し、相違する所が屋代本に近
似するといふ事は、百二十句本より屋代本への推移を示すものではあ
るまいか。

この外は、殆ど差がない。強ひてあげるならば、早艫に、

小松新三位中將資盛、同少將有盛、從兄弟左馬頭行盛三人
とあるが、百二十句本には、「三人」の所に、「にう道の四なんとも
もり」とある。又、

景經終ニ討レニケリ、大臣殿見玉ヒテ、
とあるが、百二十句本には、

かげつねつみにうたれにけり、おほいどの身にかはりてもとおもは
れけるめのとこのなりゆくありさまを見給ひて（屋代本略同じ）
とある。本書の誤脱である。劔之卷之下に、

獅子ノ子ヲ本ニ作ラセケレバ、マサルホドニゾ作りケル、目貫ニ
烏ヲ作セケレバ小鳥ト申ゾケル（屋代本略同じ）
とある。が傍線を付した所は百二十句本は誤脱である。

卷十二、この巻も鍋島本、百二十句本と同類であるが、特に鍋島本と
殆ど同文である。例へば、建禮門院大原寂光院陰居の條に、

長時不斷ノ御念佛、怠ラズ月日ヲ送せ玉ヒケリ、清涼殿ニ花ヲ結シ
朝風來テ句ヲ誘引……。

とあり、又、六代上洛の條も、

正月五日ノ夜ニ入テ都へ上リツキ、二條猪熊ノ岩上ト申所ニ文學ノ坊アリ、ソコニ入奉ル、其夜ノ中ニ大覺寺へヲワノ見玉へバ、立テ納テ人モナシ、コハイカニ思ノ餘ニ水ノ底ニモ入り玉ヒタルヤラン、サラバ有シ松原ニテ兎ニモ角ニモ成ベキ物ヲトゾ泣レケル、若君ノ飼玉ヒケルエノコノ築地ノ崩レヨリ走出、尾ヲ振テ向ヒケレバ、己レハ有ケルカ、人ハ焉チヘトゾ問レケルニコソ、責テノコトニテ有ケル、夜深ケレバ、問ベキ者モナシ、サレドモ親ノ者ノ申ケルハ、年内ヨリ長谷ニ籠セ玉フト申セバ、其ノトキ安堵ノ、齋藤五齋藤六門ヲ開テ入レ奉レバ、ゲニモ近フ人ノ栖タル景モナシ、夜ヲ待明シ聖ト共ニ高雄へ上リ玉フ、齋藤五齋藤六長谷へ參リ此由申セバ、更ニ幻トモ覺玉ハズ、大慈大悲ノ御誓モ有罪ヲモ無罪ヲモ助ケ玉フコトナレバ、カ、ル例多カリキ、女房達急下向ノ、若君ヲ喚下シマイラセ見奉テモ、只夢ノ心地ゾセラレケル、暫シ是ニテ勞バヤト宣ドモ、世ノ聞ヘモ怖シトテ、急ギ高雄へ送奉ル、聖斜ナラズノ慈ニテ、二人ノ侍共ニ哀玉ヒケリ、大覺寺ノ幽ナル棲ヲモ常ハ訪奉ル、其後鎌倉殿文學ノ許へ……。

とあるのも、鍋島本と本文である。これは百二十句本と異り、屋代本と殆ど本文である。小原御幸の條も、

諸經ノ要文ドモ、手紙ニ書テ所々ニ置レタリ、昔シ大江貞元法師、天台山ノ麓清涼山ニ住シケル時、詠ジタリシ笙歌遙聞孤雲上聖衆來迎落日前ト書レタリ、彼ノ淨明居士ガ方丈室中ニ三萬六千ノ床ヲ並ベ十方ノ諸佛ヲ請ジ奉リケンモ、カクヤト覺ヘタル、一間ナル障子

ヲ開テ御覽スレバ、竹ノ御架ゾ懸ケラレタル、麻ノ御衣紙ノ衾、昔ノ蘭麝ノ匂ニ引替タル香ノ烟ゾ心細ソキ、去ホドニ後ノ山ノ小道ヨリ……。

とあるのも同様である。鍋島本の條參照。その最後も、

イザ、ラバ涙クラベン郭公ワレモ憂キ世ニ音ヲ而已ゾ鳴ク

其後ハ法皇モ常ニ御訪ドモ有ケルトカヤ。とある。

結語

以上、鍋島本、平戸本の二本を詳細にわたつて百二十句本と比較して來たのであるが、これによりて、八坂流甲類本（筆者の分類による）は、覺一本、百二十句本、屋代本が或る時點に於いて混在することが明白になつたと思はれる。鍋島本の卷三、卷四の性格はこれを明示するものである。次に百二十句本と屋代本の前後成立關係である。多年兩本の關係を明示すべき平家異本を博搜して居た筆者に、最も有力な證據とすべき異本がかく存在し得たことは無上の喜びである。鍋島本について再び要約するならば、屋代本と覺一本の接觸融合、覺一本と百二十句本の接觸融合が認められ、卷三の卷頭より大塔建立の半ばまでは覺一本の本文で、以下は屋代本の本文であり、卷四は、卷頭より鳥羽殿颯沙汰までは覺一本の本文であり、以下は百二十句本の本文である。又卷七、卷八、卷十等の一部に於いて、百二十句本の本文に覺一本の影響と認むべき本文が混在することが注目せられる。次に百二十句本と鍋島本との比較によりて、鍋島本が簡略になつてゐる所は、

これが屋代本に殆ど一致することは、卷十二の六代など、百二十句本の簡略化が屋代本の成立を物語るものであることを明確に示すものである。

ここに於て一方流本の變化流動も合せて一考察し、覺一本より流布本の成立を觀るに、既に拙著、「平家物語諸本の研究」において述べた如く、流布本は覺一本に比して、内容的に増補せられた所は殆どなく、簡略化せられた所がある。例へば流布本には卷二の成親流罪の條、卷四、辨内侍、嚴島還御の條、卷六、如無僧都、卷十二、平家殘黨の事が無い。劔卷鏡卷などの秘事は別であるとしても、これらの點からも多くの文學史家が平家物語は琵琶法師によりて語られ、すべて増補せられたといふ方向のみで認識してゐるのは改むべきではあるまいか。一方には簡略化も働いてゐるのである。例へば富倉徳次郎博士の校訂の朝日古典全書の平家物語について言へば、この朝日古典全書の平家物語の底本は米澤文庫藏本であるが、それを覺一本と比較してみると、卷二、卷四は流布本に同じく脱文があるが、卷六、卷七、卷十、卷十二などは覺一本に極めて近く、脱文がない。この様な場合、卷六、卷七、卷十、卷十二を他の卷々と同一系統本として見るべきか否か検討すべきある。覺一本以後の諸傳本がこの様に一部に於て脱文や簡略化のある事は明白である。

さて以上の比較によりて八坂流の諸本の流動にもこの簡略化のあることは否定出来ない現象である。

次に平戸本について見るに、卷一、卷三が屋代本と同類であるが、これを百二十句の章句に分割してゐるのが注目すべきである。又卷二

が卷四以下と同じく百二十句本と同類であるが、百二十句本と異なる所もあり、漢字假名遣が鍋島本とよく一致するので、兩者が同一の如く感ぜられる所もあるが、相違する點も少くなく、特に注目せられる所は、卷二の前半が屋代本と一致し、後半が百二十句本と一致する點がその一つである。卷四の前半が平松家本に近い特異な本文であり、後半が百二十句本と同一である點もその一つである。然し二條院の時の鶴の説話がないのは鍋島本よりも屋代本と相似る性格である。卷五には都遷りの先離の事がないのが注目せられ、卷六には、慈心坊、宗論がないのは、他の百二十句本、鍋島本よりは後出と認められ、卷七には、平家願書に平家一門の連署があつて、百二十句本に近く、卷九は、百二十句本より簡略な所があり、鍋島本と一致する。卷十の中には、屋代本と本文の内裏女房の章がある。そしてその他にも百二十句本と異なる所で、屋代本と一致する所が多い。卷十二は、六代の條が百二十句本と異り、鍋島本と類して、屋代本に一致するのである。この平戸本によりて、百二十句本が簡略化されると屋代本の本文が成立することが確認せられるのである。逆に平戸本を先に成立したものとしたならば、これを百二十句本へと増補しなければならず、それには覺一本の存在を豫想しなければ、百二十句本の如き本文は増訂されるものではない。覺一本が漸次變化流動して、これらの複雑な本文現象が成立したと認める時に、はじめて多くの異本の本文が説明がつくのであつて、渥美かをる氏の岩波古典大系解説の如く、屋代本を最古として説明した場合は、屋代本より百二十句本への増補は強ひてこれを行つたとして一見説明らしくは認められるが、覺一本を屋代本よりの成

立とした場合は、多數の異本が一つに統一されるといふ事は不可能と謂はねばならず、岩波古典大系の解説に、覺一本の成立については、鎌倉本や屋代本その他の諸異本の全面的な検討が加えられたといふが、果して、八坂流古本の數本だけで、覺一本が成立するであらうか。又八坂流古本にある共通記事を如何にして、何のために覺一本が抹殺したと説明できるであらうか。覺一本の本文が漸次流動して流布本が出来た如く、八坂流本も次第に流動して多くの異本が生じたもので、一異本の性格が、特に何であるかといふ事は、平曲流傳の上から見て決定することは速断ではあるまいか。これは平曲の流動の上から次第にその様になつたわけで、一異本が書かれた時に、特に筆者が改訂したものでないので、統一あるテキストとしては見なし難い一面があらう。筆者が一異本に文學史的な意味を置かないのはこの意味で、幾度も繰り返すが、平家物語の研究は覺一本を究極の對象とすべきで、他の異本は、流動上の變化を示すもので、著作過程を示すものではないのである。幸にこの鍋島本、平戸本の出現によりて、覺一本、百二十句本、屋代本の存在關係を説明することを得るのは望外の悦びである。

追

記

鍋島本卷一の「寛仁二年五月二日」(本稿六頁下段14)は、盛衰記などに寛平元年五月十二日とあるのに關係があるが、これは平家勘文録の語によつたものである。平家勘文録に、高望王の時、「寛仁元年十二月十三日民部卿宗貞朝臣、謀叛ニヨリ宗貞ヲ追罰セシニ依ツテ、同年五月十二日上總介トナリ、平ノ姓ヲ賜ハルトイフ」とある。